

ゴッドイーター～神を
喰らう女神～

昏睡ハンター

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2056年とある出産間近の妊婦がアラガミにより捕食された。

1週間後、ゴッドイーターであった父により救出されたが、そのときすでに子供はオラクル細胞に捕食され、アラガミとなっていた。

その事を本部へ知らせず、極東支部外秘とし、友人であったヨハネス・フォン・シツクザールとペイラー・サカキとともに育児し、15年の月日がたつ。

父を2年前に失い、それでも人間として生きる彼女に《あの事件》がせまる！

この作品は筆者の処女作です。

至らない点、誤字、理解しにくい描写などが多いかもしれませんが、どうか生温かく

てもいいですから見守ってください！

よろしくおねがいします！

目次

プロローグ | 1

新型へ華麗に変身 | 6

本当に仲のいい義兄妹 | 11

乙女のグチは・・・ | 21

華麗なる神機使いエリック・デア（以下

略） | 29

サカキ博士のGE講習 | 38

用語説明&人物紹介（随時追加）

47

第三の新型 | 57

蒼穹の月 | 64

追憶の彼方 | 81

悲しみに濡れた、月が静かに――

90

大地を赤く、赤く染めて消える――

96

流るる血潮は、命の光――。

過去を夢見て

作戦会議 | 125

112 102

プロローグ

2068年、あらゆる物を食らうアラガミによって人類は滅亡への道を進んでいる。だが人類は滅亡をただ黙ってうけいれはしなかった。

アラガミを構成するオラクル細胞を使用した生体兵器〈神機〉とそれを扱う者、ゴットイーター神機使いを無数の犠牲を出しながらも開発させたことにより、人類は膠着状態へと持ち込むことに成功する。

しかしアラガミに対しての決定打を探っているうちに、じわじわと生活圏を侵食され、ふたたび危機に陥っているのが現状だ。

そんな状況に絶望せず、いつかアラガミを駆逐して世界がかつての姿を取り戻すまで戦いつづける。

それがゴッドイーターの存在意義であり、決意なのである。

〔フェンリル所属アラガミ対策兵器開発室長兼第一部隊長 荒崎京也著（2068年の現状）より抜粋。〕

2071年、状況は当時よりさらに悪くなっていた。

ビルは崩れ、森は喰われ、大地は抉れ、居住区はさらに後退した。

アラガミによるさらなる侵食を防げなかつたのである。

そんな荒廃した世界、人々には贖罪の街と呼ばれる街跡を一人の少女が歩いていった。

アラガミがうろうろする街を口笛を吹きながら手ぶらでだ。

自殺行為にしか思えないと人は言うだろう。

だが彼女はゴツドイーターだといえどだろう。神機は・・・少し理事情があつて持つていないのだと。

十人に聞けば十人は出歩く事を反対するであろうが・・・。

ちなみにその事情とは、前まで使っていた神機をつい一月前に破損させ使い物にならなくした、からである。

たとえゴットイーターであつても神機がなければすこし筋力と再生力が高い人、とてもじゃないがアラガミとは戦えない、とても言つて対アラガミ装甲壁の中から出ようとは考えもしないだろう。

それが普通だ。

しかし彼女はまるで散歩か、遊びに行くかのように楽しげに歩いている。

その理由とは・・・

「あ、コンゴウみつけ。んじやさつそく」

少女は手をのぼし、左手からまるでプレ^{神機}デター^のフォー^{捕食}ム^{形態}のような黒いオラクル細胞の塊を作り出し、それをコンゴウに向かつてのぼし

「いただきますつと」

コンゴウを丸呑みにする。

暴れるコンゴウを覆いつくすと、

ゴリゴリという音を鳴らしながら絞め砕き、数回咀嚼した後彼女のもとへ戻つていく。

「あゝひさびさのメシはうまいわゝ、いきかえるゝゝゝ」

といいながら次の犠牲者、いや犠牲猿を求めふたたび歩き始める。

「んゝつとあと2匹か。あと2匹で満足できるかなゝ？せつかくヒバリちゃんふりきつ

てきたのに……。

でも他の食らつてると回収ヘリに間に合わなくて歩いて帰るはめになりそうだし……。

「どうしよっかなあ」

そう、彼女は単身でアラガミに対抗しうる力を持ち、さらに彼女にとってアラガミは『人類の敵』でも、『絶対の捕食者』でも、『世界を破壊するもの』でもなく、ただの『食料』だからである。

そんな存在が人間なわけではない。

要するに彼女は……

彼女の正体は……

アラガミ、なのである。

が、これはそんなアラガミの少女、荒崎深夜と愉快(?)な仲間たちによってフェンリル
いや世界が変わっていく物語。

新型へ華麗に変身

「ん、やっぱりコンゴウ三匹くらいじゃはらの足しにもならないよお。やっぱり神機直してから行けば．．．少しくらいの無茶ができたのに。ミスったなあ．．．」

アナグラのエントランスでアラガミの少女、深夜が嘆いていると、

「あ、帰ってきましたね深夜さん。神機をもたずに行ったらダメだとあれほと言ったのに．．．」

「どうやって街まで行っただんですか？」

オペレーターの話しかけてきた。どうやらカウンターにへばりついてアプローチしてくるタツミからにげるためのようだ。

「ん、仲のいい操縦士がいたからね。別の部隊の帰投時間に合わせれるなら拾ってやるって。」

「もう、しかたありませんね。そうそう支部長から出頭命令が出ましたよ」

「マジ？いつ出たの？」

「3時間前です。早く行っただほうがいいんじゃないですか？」

「ひく、おこってんだらうなく。いつてくるわ」

.....

コンコンッ

「入りたまえ」

「え〜つと、ヨハンおじさん、怒ってます?」

「とにかく入りたまえ」

「ひ〜分りましたから」

「いいかげん公私というものを弁えたまえ。深夜」

「いやあ、久しぶりだね深夜君」

「気にしなくてもいいじゃん、でサカキおじさんもいるけどなんなの?」

支部長は苦い顔をしてから話し始める。

「君の神機は一月前の《事件》で再使用不能になった。なので君に新しい神機を与えることが決定した」

「ふ〜ん、近距離? 遠距離?」

「いや、どちらでもない。ペイラー、説明をまかせてもいいかね」

「了解、ヨハン。深夜君、君はこれから近遠可変型神機、通称《新型神機》を使つてもらうことになったんだ」

「え、マジで？そんなことできるの？」

「もちろん普通はできない。でも君は自分のコアが使えるから神機に制御コア【アーティフィシャルCNS】を付けなくてもいい、だから互換性の高い外側を使つてきた。ここまで分るかな？」

「ん、微妙。もつと簡単にいえないの？」

「よ、ようするに何でも使えるということさ」

「そーだったのか、アタシすごいじゃん」

「説明は終わったようだな。君はこれから新型として任務に励んでもらう。分つたかね、荒崎深夜中尉」

「リョーカイ支部長、これからは新型として頑張つていきます。で、話は終わりなの？」

「いや、もう少しある。ペイラー、少し席をはずしてくれないか」

「・・・ヨハン、深夜君は新型を見に行きたいだろうから、あんまり長く話さないほうがいいと思うよ。じゃあ深夜君、私は失礼するよ」

「・・・行つたか。では深夜、話というのは特務についてだ。」

君には1週間後から今までどうりに動いてもらう・・・以上だ。下がりましたまえ」

「はくい、1週間の休暇楽しんできます」

「任務は通常どうりだからな」

「ちえつでは失礼します」

「ふう、京也、君の娘は変わってないぞ。少しうるさいところもな……」

「……あと少しだ、あと少しでアーク計画を実行できる。あと特異点を見つければ……。そのためならばたとえ君の娘でさえも使わしてもらおうぞ！」

「……」

神機保管室、極東支部に所属する神機使いにとって大切な場所のひとつだ。

もしここが落とされてしまうと、襲い来るアラガミ達になすすべも無くやられてしまうだろう。

ゆえに守りの堅さはトップクラスである（はず）。

「リツカちゃんアタシの新しい神機ってどんなの？」

「おつ、きたきた。えーつと深夜の神機はこれだよ」

「はー、黒いね」

「これはクロガネっていつて精鋭部隊だけに支給されるものなんだ」

「へく精鋭ねく。さつそく持つてつていい？」

「うん、整備終わったからいいよ」

「あんがと。またよろしく」

「またね」

「さてと何行こうかな、つとあれはリン兄？」

ラボラトリにある自室への通路にあるベンチで一服するリンドウだった。

本当に仲のいい義兄妹

「リン兄なにしてんの〜」

「お〜深夜か、けが人の見舞いだ」

「ん？第一部隊にけが人出てたっけ」

「いや、第四に助っ人に呼ばれててな。コンゴウ二匹とグボロだったんだが、ハマしたやつがいて一人がコンゴウにフクロにされたんだ。俺はグボロとやってるところだったから」

助けられなくてな・・・かたずけてから急いで救出したんだが、全治四ヶ月らしい」

「ふくん、それはご愁傷様」

「で、なんかようか？」

「ふっふっふ聞いておどろけ、実はアタシ新型になったのよ」

「お〜お〜すごいすごい。で、使い心地は？」

「まだ使っていないから分からない。だから今から試し振りついでのおやつに行こうかと思っただの」

「つまりそのおやつに付き合えと」

「そくゆくこと。三十分後にエントランスに集合。わかった？」

「了解、上官殿」

「よろしい、ではゆきたまえ。なんてね」

「それ支部長か？ にてないぞ」

「うっさい」

そう言いながら荒崎研究室と書かれた部屋に入り、自室のベッドに書類（ヨハンに「必ず読むように」と言われた物）を投げ捨てる。

「よっしや、おやつを食いに行きますか」

――

「荒崎研究室とは」

極東アラガミ対策兵器開発室のことである。

メンバーは一人、室長の荒崎京也だけだったため、自室としても利用されていた。フェンリルから土地を買い取り、さらに電気や水道まで外部から引いていたため、アナグラから唯一独立している場所となっている。

内部は五十畳ほどの研究室と八畳ほどの荒崎親子の部屋、完全防音のプライベートルームに分かれている。

なお完全に独立しているため中にターミナルも無い。

そのためターミナルが必要な時は毎回エントランスに出てきて作業をしていた。

【ノルン・データベース参照】

――

「ヒバリちゃん、今何かウマイもんきてる?」

「いま受注可能なフリーミッションは・・・オウガテイル五匹・贖罪の街、グボロ・グボロ・鉄塔の森、コンゴウ六匹・鎮魂の廃寺です」

「ん、ソーマとエリックは?」

「ソーマさんは支部長の要請でヴァジュラ、エリックさんは第三部隊とボルグ・カムランです」

「じゃあオウガテイル、同行者リン兄で登録おねがいね」

「わかりました。あ、あと輸送ヘリが全て出ているので車をお願いします」

「ん?全部ってどうして?」

「最近、一人で行く人が多いんですよ」

「なるほど。一人で行くと高く評価されるからね、しかたないか。んじゃ行って来るね」

極東支部からの移動は通常空路が使われる。

だが一部のフィールド（贖罪の街や煉獄の地下街入り口など）には陸路で行くことも可能だ。

もちろんアラガミ装甲で作られた頑丈な物が必須だが。

ちなみに極東支部が所有するものは例外なく乗り心地はよくない。

「ねえリン兄、タバコ体に悪いんじゃない？やめたら？判断力鈍ったり体だるくなったりするってきくよ。あとクサイし」

「最後のはおまえの都合だよな。まあ、ゴッドイーターならタバコ程度の毒素は分解できるだろ。あと落ち着くし」

「いや、見てる方の精神衛生上悪いからやめてよ」

「気が向いたらな、もしくはビール三週間分かどうか」

「どうだって言ってもそもそも三週間もったことないじゃん、はじめてから六年間一度も禁煙成功してないくせに」

「次やったら成功すんだよ」

「ふくん。ところでさあリン兄」

「んん？」

「サク姉といつ結婚すんの？」

リンドウがタバコを噴きだす。

「グホツ！ゴフゴフツ。おまえなにいきなり何を」

「いい加減決めようよ、このままグズグズしてるとお互い三十路過ぎちゃうよ。パパもさあ『あいつらに遺言残すとしたら早く結婚しろ、だな』って言ってたし」

「初耳だぞ!!」

「いままで忘れてたんだもん。だから決めようよ、結婚するのか、諦めるのか」

「何で諦めるんだよ!」

「だってサク姉かわいそうだよ、サク姉だって女なんだし、子供の顔見たいだろうしねえ」

「うるせえほつとけや!!・・・言うタイミングは自分で決めるんだよ・・・」

「お、という事はプロポーズの準備が？」

「まだだ」

「ダメじゃん!!」

「うるせえんだよ！見えてきたぞ！準備しろ準備」

「ちつ、逃げられたか。はいはい分りました準備しますよーだ」

―・―・―・―・―・―・―・―・―・

「贖罪の街」

極東支部外部居住区からそう離れていない場所にあるフィールド。

かつて極東支部成立当時地下居住区をアリの巣のようにアナグラ地下に広く作るという計画があり、その大部分が街の地下にあった。

だが計画途中に防壁が破かれ多大な犠牲を出したため、居住区の後退と共に凍結された。

そのときに張り巡らされた作業用通路が放置されたまま残っている。

その一部は生きているが大部分はアラガミに侵食され、アラガミの通路と化している。

なお通路の電源が外周部にあつたため事故時に電気を落とすことができなかつた。

そのため生きている通路には電気が通っている。

この通路は第五部隊の管轄である。

【ノルン・データベース参照】

――

「今回の作戦会議。前衛リン兄、遊撃兼とどめアタシオーケー？」

「分った、背中はまかせた。・・・行くか」

少し歩くと食事の中のオウガテイルがいた。

リンドウがブラッドサージを構え切りかかろうとした瞬間、後方から伸びてきた
深夜のオラクル触手
プレデターフォームがオウガテイルを丸呑みにする。切りかかる寸前だったリンドウ
は中途半端な姿勢のまま固まってしまう。

「・・・」

「あ、コアも食べちゃった。ま、オウガテイル程度いいか」

「・・・次行くか」

同じ事が繰り返され、深夜に四匹ほど飲み込まれた時、リンドウがキレた。

「おい！銃つかえよ！試し振りなんだろうが！」

「はいはい。次はそーするから」

「つか前衛は俺だろうが！なんでおまえが入って来るんだよ！」

「え、とどめはアタシって言ったじゃん」

「確かに言ってたが、それでも」

「だって一撃だし」

「……………」

落ち着くために新しいタバコを出す。

息をゆっくりはいていると、廃墟からオウガテイルが出てくるのが見えた。

「援護に徹しろよ、援護だからな！」

「リョーカイリョーカイ、早く行きなよ」

青筋をたてて叫ぶリンドウにオウガテイルが気がつき威嚇する。

その隙を逃さず騒音を鳴らしながら、リンドウはブラッドサージで斬りつける。

チェーンソーのように回転する鋸刃が容赦なくオウガテイルの皮を切り裂きオラクル結合を断つ。

リンドウの攻撃に苦悶の声を上げながらの反撃をステップで避け、追撃しようと踏み込んだ瞬間、リンドウに弾丸が襲い掛かる。

「ウグツ！おい！なにして……………」

振り返ったリンドウが見たのは、クロガネ強襲型を乱射する妹分の姿だった。

ちなみに、一発もオウガテイルに当たっていない。

「おい！しっかり狙って撃てよ！」

「やってるけど当たらないのよ！」

そうしているうちにOPが切れた

結局リンドウに一発あてただけで終わった。

オウガテイルも啞然としている。

妙に人間くさいオウガテイルだ。

「もーいい！！諦めた！！」

怒って最後のオウガテイルもプレデターフォームで食らいつく。

オウガテイルも凄まじい反射速度で飛び退くが下半身を喰いちぎられる。

その瞬間、オラクル結合が弱まり上半身が霧散してしまった。

「あ、コア取れなかった」

「そうか、これで終わりだな。とつとと帰るぞ。車なんだから早く出ないとメシに遅れ

ちまう」

「は〜い」

その後、車に乗るときにオウガテイルを見つけもう一度チャレンジする。

レーザーを使つての狙撃だったが大幅にはずれ、全弾撃ちつくしても気づいてすらも
らえなかった。

「おまえ本当にヘタだな、初任務の時のサクヤでももう少し当てたぞ」
「うるさくいい」

ボクッ。

「いてーな。なにすんだコノヤロウ」

ゴッ。

「っ。殴り返すな」

ドフッ。．．．．．

夕日に照らされながらの帰り道は、沈黙が痛かった。

乙女のグチは・・・

「おかえりなさい。新型の使い心地はどうでした?」

「お、興味あるの? すごいよ、まず変形めんどくさい。次にアタシの射撃の才能が0だとわかった」

「そ、それだけですか?」

「うん」

「さ、才能0って具体的にどのくらい酷いんですか?」

「んとね、リン兄に『次行くときは銃使うな。使いたいならサクヤに矯正してもらってからにしろ』って言われるくらい」

「そ、それはすごいですね」

「リンドウさんがそこまで言うほどっておまえ、どれだけひどいんだよ」

ヒバリとタツミが呆れた顔をする。

「射撃で言われるってことは誤射だよな。カノンでさえそこまで言われたことない、つまりおまえカノンよりひどいっていうことか」

「失礼ね、・・・同じくらいよ」

「おいおい、冗談だったのに・・・。」

「うっさい！だからこの後サク姉に矯正してもらおうの。ヒバリちゃん、リン兄がコクーンメイデンのミッシェン出してない？」

「出されてますよ」

「それに同行者サク姉でお願い。じゃあ行って来る。タツミ、なめてたらほえずらかかしてやるからな！」

と言い放つてから出発ゲートに走っていく。

「元気なやつだなあ。京也さん死んじまった時と比べたら別人みたいだな」

「そうですね」

「・・・」

「・・・」

「で、ヒバリちゃんこの後時間ある？」

「タツミさんに使う時間はありません」

「え〜」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「ねえサク姉」

バババババババツ

「なに？深夜ちゃん」

ババババババババツ

「リン兄といつ結婚できそう？」

ババババババババババツ

「ウツ。な、なにを言い出すのよ深夜ちゃん!」

ババババババババババババツ

今二人が乗っているのはフェンリル極東支部が所有する神機使い用輸送ヘリ。

なぜここまで騒音が酷いかという移動スピードのためにほかの全てを犠牲にしているからだ。

対アラガミ装甲を使つていようとヘリコプター。

落ちるときは竹やりで落されるほどもろい。(実話！)

大型どころか小型アラガミ(鳥型の小物やザイゴートなど)でも危ない。

なので装甲を厚くしてもムダ(そもそも空を飛ぶ物なので限度がある)。

ゆえに撃墜されないためにはアラガミにつかまらないスピードでゴッドイーターを

投下し素早く離脱するのが一番だと考えた。

そのためならばと乗り心地や装甲の厚さを捨てた結果が、このFH-1000【フェンリルホーク】である。

出力を上げるため載せられる限界のモーターを載せたことによりくせが強すぎて操縦士が限られる、悪天候時は飛ばせれない（雨で体勢がくずれ風に負ける）、騒音が大きすぎて遠くにいるアラガミにすら見つかる、ヘリコプターなのに（鷹）といった突っ込みどころ満載な機体だ。

ヘリコプターを落しうる大型アラガミに聴覚が強いものが多かったことが追い討ちとなり、フェンリルが所有した物のなかで一番被撃墜率が高い。

現在残っているのは極東支部だけとなっている（二機だけ）

そんな雰囲気のない場所で恋バナ（一方的）をしてたわけだが。

「聞いてよ深夜ちゃん、リンドウったら私がいらアプローチしても気づかないのよ。なんでかしら？きいてる？」

「ア、アハハ、リン兄鈍感（？）だからね」

『・・・ヤバイ！地雷踏んじやった。・・・』

いつのまにかグチ（一方的）に変わっていた。

「だ、大丈夫だよ。昨日リン兄にクギさしといたからさ」

「どういふふうに？」

「グズグズしていると間に合わないぞって」

「……………」

「あ、みえてきたよ。早く準備準備」

「ええ」

誤魔化し方など妙な所が似ている義兄妹だった。

……………

コクーンメイデン

アメリカで発見されたアラガミで処刑道具であるアイアンメイデンに似て体内に鋭い棘を持つ、このアラガミの特徴は地中に根を張ってその場から動かないことと、正確無比な狙撃能力である。

実はその特徴を利用した特殊な特訓法があり、時々活用されている。

新人にはお勧め出来ないが、相手の攻撃を避け素早く狙い撃つというもの。

これはベテランの遠距離型神機使いにとって大切な技術だ。

だがそれが出来ない者のためのさらに難易度を落としたものもある。

それは動けないのをいいことに反撃の射程外から狙撃の的にすること。

「ほら、しつかりと狙うのよ……。今よ！」

ビツという音とともにレーザーが飛んでいく。

・・・コクーンメイデンの横を。

「・・・ねえ、確かホームミング弾よね」

「・・・そのはずだけど」

もう一度撃つ。

またはずす。

「あゝゝもゝいや!!・・・死ねえ!!」

悪態をつくくとプレデターフォームでコクーンメイデンを引っこ抜き喰らう。

OPがきれるたびに食べられもう九匹めだ。

「あく、また食べた。もう残り一匹よ。次こそ当てれるようにならないと」

「はいはい、がんばりますー」

「もー」

そう言いながら嘆きの平原を見て回る。

すると食べたコクーンメイデンをOPに変え終わると同時に最後の目標を見つけた。

「これで最後よ。当てられるように頑張らなさい」

「ん、頑張る」

神機を構え、スコープを覗き、撃つ。

・・・またはずれた。

ちなみに使っているのはSサイズの全方向ホーミング、一発あたりの消費は7だ。

最大OPを100と考えても14発撃てるはずで。

・・・今140発目が空に消えた。

「がくく!!もういやーアタシ銃使わない!一生近距離でいい!」

そういういながら最後のコクーンメイデンも喰らった。

「仕方ないわね。もう居ないみたいだし、帰りましょうか」

「は、疲れた。狙撃って大変だね。狙いをつけるのもきついの。普段は周りにも気をつ

けなきゃいけないなんて。ま、アタシはやらないけど」

「は、先は長いわね・・・」

近づいてくるヘリの爆音がサクヤのため息をかき消してしまう。

リンドウと深夜、
ストレスの種は増えるばかりだ。

華麗なる神機使いエリック・デア（以下略）

翌日・・・。

サクヤに用事が出来たため特訓矯正訓練が中止になった深夜はメシに誘おうと思いついてソーマ達を捜していた。

へんく保管室にも食堂にもサカキおじさんのところにもいない。という事はまだ寝てるのか。起こしてやろうっと

そう思いソーマの部屋に向かう。

その顔は悪戯っ子の顔だった。

|・|・|・|・|・|・|・|・|

ベテラン区間

ゴッドイーターの居住区のひとつで一定以上の手柄をあげた者に部屋が与えられる。

設備は他の部屋と変わらないがここに居るだけでさまざまな特権が行使できるようになる。

定期給与の増加、配給の増量、高ランクミッションの受注権利、ノルンのアクセス権限上昇など、

さらに部屋のセキュリティも上がる。

同時に責任も付くがこれは後日改めて話そう。

部屋の鍵は腕輪認証もしくははカードキー（清掃員が入るため）なのだが・・・

――

ソーマの部屋に着いた深夜はボタンを迷わず押す。

扉の開閉ボタンだ。

が、鍵が掛かっているのか開かない。

「ふん。これくらいのリックなんか・・・」

深夜は指先からオラクル細胞をつくりだし、意図的に情報をあたえ白いカード状にす

る。

それをカードリーダーに通すと・・・

ピツという音とともに扉が開き、

「こんなもんよ」

と言いながら深夜は中に入っていく。

――――

視点へソーマ

その時ソーマ・シックザールは考え込んでいた。

俺は人間なのか、それともアラガミなのか。

いつまでも解決しない大きな問題だ。

だがそんな疑問に答えてくれた者が一人いた。

『どつちでもいいじゃん、大切なのは自分がどう生きていくかじゃない』

単純な、でも抜け出せない負のスパイラルに囚われていた自分を救った一言。

「んく相変わらずごちゃごちゃしてるな。さて、ターミナルのファイルは：ちつロック掛かってる。ソーマの腕輪のパターンをコピーしてと」

「おい」

大切な一言を言ってくれた幼馴染は・・・俺の部屋を家捜ししていた。

「なにしてる」

「サク姉用事出来てヒマになったからメシでも食いに行こうって思ったんだけどいける人誰もいなくて。仕方ないからソーマ起こそうかと、入ったついでに確認しよう」と

仕方ないんだよ、という顔をしながら言い訳をする。

「・・・見ても中に入っているのは特務関連だけだぞ」

「そくなの」

少し落ち込んだ顔をする。

相変わらず表情がよく動くヤツだ。俺よりもよっぽど化け物なものな・・・。

「・・・相手はなんだ？」

「オウガ&メイデン、協力してくるらしいよ」

「分った、付き合おう」

「あんがと。エントランスでね。あとエリックも一緒だから」

「誰もいないと言っていたのにエリックがいるな」

「エリックは数えてないからね」

「扱いがひどいな。分った、準備するから先に行つてろ」

「早くしてね」

バカに見えても俺を救ってくれたんだ。なら次は俺が救つて、助けてやる番だ。そう何十回目か分らない決心をしながらソーマは床から立ち上がった。

| |

ソーマの眠り方

ソーマは主に床で寝ている。

理由は部屋中に物を置いておりベッドの上も例外ではないから。

ちなみに本人曰く座り込むほうが寝付きがいらしい。

| |

鉄塔の森

深夜はエリックと話しながら獲物を探していた。

ソーマは少し離れて付いてきている。

「その時僕は頭上の影に気がついた。それから考えずに撃つたね。そして華麗にシユウを倒した僕は襲われていた人に『僕はエリック、エリック・デアⅡフォーゲルヴァアイデ。極東の誰もが認める華麗な神機使いさ』と言ったら『ありがとうございます。エリックさん』とお礼を言ってくれたんだよ」

「はいはい、エリックすごい」

エリックのつまらない自慢話にウンザリして適当に返し始めた時、

「つまり何が言いたいのかというと、君たちもせいぜい僕を見習って人類のために華麗に戦ってくれたまえよ。と言いたいのです」

「エリック！上だ！」

「う、うわああー!?!」

エリックがオウガテイルに襲われた。

オウガテイルが馬乗りになり頭に噛り付こうとした瞬間、ズドンという音とともにオウガテイルと

「グホウツ」変な呻き声を上げるエリックが吹き飛ぶ。

弾種は市販バレットのモルター系のようだ。

「ボーつとするな!!」

ソーマが吹き飛んだオウガテイルの焼けた皮膚をイーブルワンで両断する。

「大丈夫か？」

少し服から煙を上げているエリックに聞く。

「あ、ああ。ソーマに深夜君助けてくれてありがとう。」

「・・・ん？どうかしたのか深夜・・・!？」

こんな事が起きれば文句言いまくつたあとに威張り散らすはずの幼馴染が沈黙している事を疑問に思つて振り返ると、そこには

「エへへへ、ソーマ！アタシ初めて弾当てれたよ!!どうだータツミ！当ててやったぞコ

ノヤロウ!!」

満面の笑みを浮かべて叫び出している深夜がいた。

それは付き合いの長いソーマですら引くほどだった。

その後、深夜は素早く残党をかたづけ、リンドウとタツミに自慢しにいった。

その時にあった会話の一部。

「いや、その距離だと当てられて当然だろ」

「うっさい！ 黙れリン兄!!」

「グツ、コノヤロ」

「ツツ、殴ったなあ」

「ちよ、深夜にリンドウさん、殴り合いのケンカはやバイって。おいブレンダン止めるの
手伝ってくれ!」

「分った。落ち着くんだ深夜」

「コラ!! そこのお前達、何をやっている!」

「やっべえ姉上だ。逃げるぞ深夜」

「ガッテン、リン兄」

「ちよ、まったく仲がいいのやら悪いのやら」

「リンドウさんは深夜が関与すると幼く見えるな」

「確かにガキっぽくなるよな。でもあれもリンドウさんの魅力のひとつだろ」

「そうか?」

結局その日は二人とも徹夜で説教された。

サカキ博士のGE講習

さらに翌日、エントランスにて。

「眠い……、ツバキ姉め、いつか階級越してやる」

さすがに徹夜しての説教は効いたらしくフラフラになっていた。

そんな深夜にきよろきよろしている少年と落ち着いた少女の姿が目に入った。

「あ、そういや新人来るの今日だったか。リン兄目の下にクマ出来てる状態で新人達と会うのか。すごく威厳無いね。……挨拶しとくか」

|・|・|・|・|・|・|

視点へコウタ

自分とほぼ同時に配属となった少女についてのコウタの第一印象は『大和撫子』だった。

へどう話しかければいいかな……

「コウタは話しかけるきつかけを必死に考えていた。

「そうだ！ポケットにガムが・・・あった。これで・・・」

「ねえ・・・、ガムたべる？」

「すみません、ガムは少し苦手です」

「あ、そうなんだ」

「・・・」

「・・・」

「へ話続かねー、つてガム今食ってるのが最後だったし。クソ、なにかきつかけを・・・」
そんな時、黒髪を散切りにした少女が偉そうに話しかけてきた。

「ようルーキーども、お前らにこのクソツタレな日常を生き抜く自信はあるかい？」

「年は俺と同じか少し下に見えるけど・・・偉そうにしてるな、こいつ」

「つて、スズ!?なんでアンタがここにいんの!？」

「あら深夜さん、お久しぶりですね」

「うん久しぶり、じゃなくて！アンタはこんな所に来なくても十分生きていけるでしょうが。しかも神機使いになるなんて・・・。もしかしてあのクソジジイにフェンリルの情報とつてこいとかわれてんの？」

「いえ、自分の意思で神機使いになっただけです」

〈これは・・・もしかして知り合いなのか？チャンス!!〉

「ねえねえ、あんた達知り合いなの？」

「ん？アンタ名前は？」

「俺の名前は藤木コウタ。今日配属になった神機使い。でアンタ等は？」

「私は出雲いずも 鈴蘭すずらん、ランと読んで下さって結構ですよ、コウタさん」

「アタシは荒崎あらいざき 深夜みよ、第一部隊所属で階級は中尉。何があっても絶対に苗字で呼ばないこと。コウタ、これは上官命令よ」

「は、はい！」

〈ちゆ、中尉!?こんなのが？嘘だろ!?ん？いずも?〉

「ねえ出雲ってもしかしてあの出雲電気なの？」

「はい、その出雲です」

「ましで!!超お嬢様じゃん！」

「いえいえ、それほどでもありませんよ」

「そうよ、出雲家は子供だからって甘やかしたりしない所だからね。半人前だったら六歳でも雑用させられるんだから」

「うわ、きびしいな・・・。って深夜はなんで知ってたんの？」

「深夜さんと呼べ。アタシは一時期出雲家に預けられてたからね」

「へー」

「ん？、ウゲツ、ツバキ姉！アタシ逃げさせてもらうわ。健闘を祈ってるぜい。じゃね〜」

深夜は走つてにげていった。

へツバキ姉？誰だろう、あの白い服を着た美人のことか？

その白い服を着た美人はコウタ達の前に来ると、キツイ口調で命令した。

「立て」

「へっ？」

「立てと言っている。立たんか！」

「は、はい！」

急いでコウタは立つ。

どうやらランは一言目で立っていたようだ。

「これから予定が詰まっているので、簡潔に済ますぞ。私の名は兩宮ツバキ、お前達の教練担当者だ。これからの予定はメデイカルチェックを済ませたのち、基礎体力の強化、基本戦術の習得、各種兵装の扱いなどのカリキュラムをこなしてもらおう。今までは守られる側だったかもしれないが、これからは守る側だ。つまらない事で死にたくなければ私の命令にはすべてYESで答えろ、いいな」

ツバキは二人を見ながら言う。

「わかつたら返事をしろ！」

「はい！」

「へそつか、これからは俺も守る側なんだ！母さんやノゾミのために頑張らないと！」
コウタはそう誓ったのであった。

出雲電気

2032年、出雲菊治によって創立された総合電気会社。

代々続く老舗織物店の次男だった菊治が「織物の才能が無いから別の道を選ぶ」と言
い友人と共に始めた修理工場が元。

その道の才能はあったのか十年のあいだに日本有数の電気会社になった。
フェンリルには商品を割安で提供しておりお得意様。

極東支部の電気製品の約九割が出雲電気製

| |

数日後……。

コウタとランは初の実践の後、サカキ博士の座学を受講するように指示された。

サカキ博士の研究室

「きたね。コウタ君、スズラン君」

「いらつしやうい。サカキ博士のGE講習へようこそ」

「えっ？なんで深夜さんがここに？」

「解説兼助手、ツバキ姉に命令されたのよ。とりあえず早く座れ」

「は、はい」

二人がソファアーに座ると同時にサカキ博士が口を開く。

「さて、いきなりだけど君達はアラガミってどんな存在だと思う？」

『人類の天敵』『絶対の捕食者』『世界を破壊するもの』ま、こんな所かな。

これらは認識としては間違っていない。

むしろ、目の前にある事象をよく捉えられていると言えるだろうね。

じゃあ、何故どうやってアラガミが発生したのかって考えたことあるかい？

キミ達も知つてのとうり、アラガミはくくく（以下略）ここ極東地区の神々の名にたとえ『アラガミ』と呼ぶようになったのさ。さて、今日の講義はここまでにしよう」

「あ、あのさ」

「なんだい、コウタ君」

「み、深夜さんはアラガミだってきいたんだけど・・・本当なの？」

「・・・」

サカキは深夜を見る。

そして深夜がうなづくのを見て口を開く。

「深夜君は・・・たしかにアラガミだ、だが同時に人間でもあるんだ」

「ええっ!？」

「かつて深夜君は胎児期にアラガミに捕食され、深夜君もアラガミになってしまった・・・」

アラガミは取り込んだ物の性質を自らに模写する特性を持っている。

これは取り込んだ物の約五パーセントから十パーセントと言われているんだけど例外もあるんだ。

時々五十パーセント以上模写したと思われる新種アラガミが見つかっているし、初期のアラガミは従来の生物にかなり酷似していたしね。

そして深夜君は人間の性質を八十パーセント以上模写しているんだ。

具体的に言うと、深夜君からはアラガミが本来持たない脊髄や臓器、さらにDNAや

ミトコンドリアが見つかっている。

どこまで機能しているのかは分らないけど六歳までは人間と同じ食事で生活していたことや、人間とほぼ同じ成長速度を持つことから八割以上は機能していると思んだ。

深夜君は人間の構造を持ち、アラガミのオラクル結合を持つ、まさにアラガミでもあり人間でもある存在なんだ」

「危険はないんですか!?!急に人間を食べだしたり、暴走したりする事とか無いって言えるんですか!?!」

「無いと言いつ切る事は出来ない、なにせ前例が無いからね。

でも十五年間異常は無かったし、ちゃんと検査もしている。

さらに深夜君は偏食因子を自在に操る事ができるから万が一暴走しても私たち人間に被害は殆ど出ないだろう。

なにより深夜君は人間として生きたいと言っているから、アラガミ側に付いたりしないと思うよ」

「そうなんだ・・・」

「質問は終わりかな、改めて今日の講義は終わりとしよう」

コウタ達が出て行つた後、サカキと深夜は話していた。

「本当に言つてもよかつたのかい？」

「嘘ついてもいざればれるし同じ部隊だからね。気まづいままつてのは嫌だもん」

「それにしても誰から聞いたんだろかね？」

「どうせシユンとカレルでしょ。あとでやり返してやる」

翌晩、深夜とシユン、カレルは仲良くツバキの説教をくらつたのであった。

用語説明&人物紹介（随時追加）

用語説明

『オラクル細胞』

オラクル結合を持つ単細胞生物。

細胞表面上にある『口』を使ってありとあらゆる物を吸収する。

現在、オラクル細胞を完全に死滅させる事は不可能とされている。

『オラクルエネルギー』

オラクル細胞が蓄えているエネルギーの総称。

オラクル細胞のエネルギーの貯蓄方法は極めて効率的で既存の方法の約一万倍と言われており、それだけの高エネルギーを保有するため核爆発にも耐えうる結合力を持つとされている。

ちなみにオラクルエネルギーは神機の銃形態にもOPガンフォームとして使われている。

なおオラクルエネルギーを限界まで搾取された細胞は死滅せず休眠状態になり、オラ

クル細胞が集合した際に別の細胞からエネルギーを渡され活動を始める。

そのためエネルギー切れによる死滅はありえない。

(エネルギー切れによりオラクル結合が解ける場合はあるためアラガミを死亡させることは可能)

『進化型神機』

最初期に作られた神機。

小型アラガミ(オウガテイル未満の物)のコアを不完全に封印した状態で使用する事により喰らえば喰らうほど進化する。

初めは果物ナイフと同じ大きさだが使い続ければ現在の物を超えるだけの力を持つことも可能。

だが問題点が多いことが判明したことにより生産禁止となった。

問題点とは少しずつ進化するため何度も外装を完全に作り変える必要があるため素材と費用が掛かることや、さらには偏食因子による制御が難しいため使用者が神機に捕食されるという事件が多発したこと。

二年前に最後の使用者が死亡したため現在使用者はいない。

『アラガミ対策兵器』

荒崎京也が開発した兵器のこと。

ここでは現在極東支部で使用されている物の中から3種類紹介する。

『オラクルストップパー』

マーナガラム計画時に開発された電磁波発生装置。

オラクル細胞の活動を阻害する効果を持つ。

ただし少数のオラクル結合によって作られたアラガミ（オウガテイル程度）までにか効き目がないため現在はアラガミの解剖時や神機の保管に使われている。

『オラクルパニッシャー』

京也曰く「アラガミの偏食因子をずらす音波発生装置」

仕組みはオラクル細胞に特定周波の音波を浴びせると共鳴することを使い、偏食因子を書き換えオラクル細胞同士で共食いさせるといふもの。

原理はG O D E A T E R 2 に出る感応種に近い。

効果は高いがゴッドイーターやアラガミ装甲壁にも影響があるため極東支部から離

れた地域で使われている。

燃費が高い。

『オラクルジャマー』

極東支部設立から2年後に作られた音波発製装置。

オラクル細胞の集合によるアラガミの形成を阻害する。

オラクル細胞や偏食因子に直接干渉するものではないためアラガミ装甲壁に直接取り付けられている。

人物設定&紹介

荒崎あらかき 深夜みよ

設定

2056年生まれ 現在15歳

2065年フェンリル極東支部第一部隊入隊 強襲中尉

元旧型神機 現新型神機

神機

クログネ強襲型 試作1クログネ長刀型 試作1クログネ大盾型 試作

胎児期に母親ごとアラガミに捕食されアラガミの体内で一週間過ごす。

その間にオラクル細胞に喰われアラガミとなった。

喰らった物の情報を記憶し作り出したオラクル細胞に与えることである程度までの物はコピーできる。

さらに自由に偏食因子を作り出すことも出来る

普段の偏食傾向は自分よりも高いエネルギーを保有するもの、つまり自分より強い物。

オラクル侵食力を持ったためアラガミが元気な状態でも噛み砕いて吸収可能。

理論上はコアの役割をもつ脳だけになっても生存可能で約三時間で再生できる。

オラクル細胞を純粋なエネルギー変えることが出来る（エネルギーを取り出すのではなく、細胞を交換できる）ため唯一アラガミを完全に殺しうる存在といえる。

これを盾に本部と交渉しようとヨハネスとペイラーは考えている。

なお2071年に一度暴走を起こし直径80メートル、深さ20メートルのクレター状に喰らうという事故を起こしている。

その罰は一ヶ月の謹慎と実験への強制参加だった。

紹介

身長150cm

背が低いことをきにしている。

肌はシオのように真っ白ではなく、普通の日本人のような肌色。

黒髪を散切りにしている。

理由は髪もオラクル結合をもつたため通常の道具では切断できないから。

昔は父に神機できつてもらっていたが今は自分で適当に切っている。

性格は普段は生意気だがいざと言うときは仲間を絶対に守り通す勇気を持つ。

フェニル極東支部設立時からいるため家も同然。

普通に料理も食べれるがアラガミの方が美味しく感じる。

実は妹か弟が欲しい。

あらざき きょうや
荒崎 京也

設定

2023年生まれ 享年45歳

2055年人類初のゴッドイーターとなる。

最終階位は大佐

進化型神機 近接型

神機の見た目は鉄乙女剣

遺伝子学、電気工学のスペシャリストで数々のアラガミ対策兵器を作り上げた技術屋でありながら、前線で戦い続けた人類初P53因子を使った神機使い。

ペイラー・サカキとヨハネス・フォン・シツクザールとはアラガミ総合研究所時代からの友人。

ラボラトリの一角を買い取って研究室兼自室にしていた。

2069年作戦行動中に異常発達したスサノオに襲われKIA（戦死）となった。

紹介

中肉中背、ぼさぼさの黒髪、ボロボロな白いコートが特徴。

普段着は白衣だった、戦場では制服の上にもで着るほど。

飄々とした性格だが仲間思い。

ゴッドイーターになる時に言った「技術屋が前線出てもいいだろ」は有名。

死亡の直前まで秘密裏に何かの研究をしていたようだが？

いずも すずらん
出雲 鈴蘭

設定

2053年生まれ 現在十五歳

2071年フェンリル極東支部第一部隊入隊 新兵

新型神機

現在世界最大の総合電気会社、出雲電気の一人娘。

出雲家では自給自足自立自衛を掲げており幼少期から様々な教育を施される。

その教育（余りの厳しさに児童虐待とも・・・）を乗り切っただけにはあり、礼儀作法の他、戦術、格闘術、医薬学、生物学、地学、工学、サバイバル技術・・・と何でもござれの完璧超人と化している。

紹介

濡羽色のロングヘヤーに控えめな体の典型的な和服美人。

性格は大人しいように見える。

有事であれば冷静に指示を出し、仲間をまとめめる強い精神力を持つ。

が、何でも一人で抱え込み、解決しようとする悪癖を持つ。

羅^{らの}法^{のみ} 道^{ちひ}彦^こ

設定

2036年生まれ 現在三十五歳

2058年フェンリル極東支部第一部隊入隊

2071年現在 第四部隊隊長 輸送大尉

旧式神機

尾弩イバラキ（カスタムを重ねブラスト弾や高出力レーザーが装填可能となっており
ほぼ一点もの）

初期の旧式神機を使う現存する最古の神機使い。

高い実力を持ちながら堅実第一に行動するため彼が率いる部隊の死亡率は極端に低い。

多くの武勇伝を持つが語るのをめんどくさがっているためかあまり広まっていない。

妻子持ちで家族全員神機使い。

つまり妻も子も神機使いである。

ツバキにとっては神機の使い方から戦いの定石、心意気にいたるまで全てを教わった
恩師であり、なかなか逆らえない。

紹介

少し色素が薄い黒髪と茶のかかった瞳を持ついい年したおっさん。

身長は少し高めで元から目つきが悪いため、向き合うと威圧感を感じるが性格は快活

で面倒見がいい。

女性からの人気はまあまあだが男性からは兄貴と慕われている。
本人もまんざらでないらしい。

第三の新型

視点〈深夜〉

「はく満腹満腹、ヴァジュラが乱入してくるなんて今日はついてるな〜」

最近大型アラガミが大人しいせいでいいミツシヨ食ン材が無いからこまってたんだよね。
。と思いながらエレベーターに乗り込む（ここでのエレベーターとは出撃ゲートのこ
と）

エントランスには第一部隊の面子がそろっていた。

「ん？みんな集まってどつたの？」

「お、やつと帰ってきたか。姉う・・・ツバキ中尉殿からの集合命令だよ。お前にも出て
るはずだよ」「・・・聞いてない。いや、聞き流したかな？たしかヴァジュラを殺ってる時になんか聞
こえたような気がする。・・・まあ、ばれなきや大丈夫だよねっ」

「ああ、ばれていなければ問題なかっただろう。だがもう聞こえている」

後ろから声が聞こえたと同時にファイルがアタシの頭にめり込む!?

「グツハアツ!?!」

ツバキ姉はさらにアタシに流れるようにヘッドロックをかける。

「階級は同じでも役職は私のほうが上だ、つまり私が上官ということだ!上官の命令は絶対、そんな基本的なことも分らんのか!しかも聞き流していただと!!キサマは極めつけのバカか!!」

ギヤアアアア!あ、頭が!頭がミシミシいつてる!!割れる!頭が割れるく!

かわいい妹分のピンチだよ、助けて。とリン兄に視線を送ったら目を逸らされた。

は、薄情者く!

「いたいイタイ痛い!ゆ、ゆるして・・・もうしませんからゆるして」

「ほう、何をもうしないのか言ってみろ」

「命令無視です!上官の命令を二度と無視しません!だから放して・・・」

ああ、意識が遠のいていく・・・。

「よし、もし無視してしまつたら・・・、どうなるか分っているな?」

「は、はいく肝に銘じますく」

カハア、ようやく開放された。アラガミなのに死ぬかと思つたよ。

クソツいつか絶対に追い抜いてやる。そして命令し返してやるんだ！
しかしあまりもの一方的な処刑に驚いたのか後ろの娘が目を丸くしてるじゃん。つてその娘だれ？

「では紹介するぞ、本日からお前達の仲間になる新型の適合者だ」

「アリサ・イリーニチナ・アミエーラと申します。本日一二〇〇付けでロシア支部からこちらの支部に配属になりました。よろしくお願いします」

ツバキ姉の横から少女が出てきて挨拶した。

ふむ・・・この弱い人達とは戦えませんかと言わんばかりの雰囲気、実戦経験殆ど無いな・・・たぶん。

「女の子ならいつでも大歓迎だよ」

とコウタがさっそく馬鹿なことを言った。

初対面でそれはちよつと・・・

「・・・よくそんな浮ついた考えで生きながらえてきましたね」

おお、これはまた辛口な。

「・・・へ？」

まあ急に言われると戸惑っても仕方ないか。たとえ正論でも。

「彼女は実戦経験こそ少ないが演習では抜群の成績を残している。追い抜かれぬよう

精進するんだな」

やった、当たってた。しかし頭でっかちタイプでこの性格か・・・友達少ないだろうな。

「り、了解です」

「アリスは以後、リンドウについて行動するように、いいな？」

「了解しました」

「リンドウ、資料等の引継ぎをするので私と来るように、その他のものは持ち場に戻れ、以上だ」

リン兄はツバキ姉とともに去っていった。

「ねえねえ君ロシアから来たの？あそこつてすげえ寒いんでしょ？あ、でも最近異常気象で温度が高くなってきたって言ってたっけ」

本当にバカだなあ。少しは考えてしゃべったらしいのに。

「気温は特にこちらと変わりません。・・・あなたは少し考えてから話すことすら出来ないんですか」

「うばあ!？」

あゝあ、言っちゃった。

「これ以上話していても時間の無駄です。失礼します」

アリサは言いたい放題言つて去つていった。
時間の無駄ねえ。

「だ、大丈夫かいコウタ君？」

「……うん……」

「君が必死に仲良くなるうと頑張つてゐる姿はとても華麗だったよ。だから自信を持ち
たまえ」

「……有り難うエリック」

ふくんあの二人案外気が合うかもね。

その後はサク姉の「とりあえず解散しましよ」という言葉で終わった。

| · | · | · | · | · | · | · | · |

深夜の苦手

深夜は痛覚を常人程度に設定している。

さらにオラクル細胞の切断よりも打撃のほうが
痛みを伝えやすいという性質上絞め技に弱い。

トラウマになっている技はツバキのアイアンクロー。

――――

視点（ヘリンドウ）

「期待の新人ですね、レア物の新型がそろっている支部ってここくらいじゃないですか」
俺はエレベーターの中で姉上と新人・アリサについて話していた。

「まあそうだな。だが本部の意向で今後は新型の適合者発掘が優先されていくらしい」
おーおーまだ増えんのか。新人の担当は俺だから何人か見るんだろうな。
きつくなるな。

と、思っていると姉上が心配そうな顔で口を開く。

(ちなみに人前で姉上と呼ぶと死ぬ思いをする。3年ほど前にやって床をのた打ち回る
ことになった)

「ただ彼女の場合適合しているものの若干精神的に不安定なようだな。

定期的に主治医によるメンタルケアのプログラムが組まれているようだ。

まあ、とにかく注意を払ってやってくれ」

精神的に不安定ね。こりやあ深夜の正体は言わないほうがよさそうだな。

あの性格ならシユンやカレルとは話にもならんだらうからばれることは無いな。

「了解です姉上」

ゲッしまった、言っちゃまった。

「リンドウ、ここで二度と姉上と呼ぶなといったよな！」

「痛つてえええ．．．くうう、スミマセンツバキ中尉殿。失言しました」

「よし、これからもそう呼ぶのだぞ。いいな」

といいながらエレベーターから出て行く。

ヒールで足を踏み抜くとか、鬼だろ．．．。

「おいリンドウ、何をしている早く来い」

「了解っ」

くそっ、いつか絶対に階級抜いてやる！

蒼穹の月

支部長室

「今回の特務は旧市街に潜伏しているヴァジュラのコア回収だ。

なお今回の特務にはアリサ君を同行させる、以上だ」

「は、アリサを……ですか」

「何か問題でも？」

「いえ、問題はありません。ただ、出来れば理由を教えてくださいなんですが」

「ふむ、アリサ君は実戦経験がまだ少ない、少しでも実戦を経験して早く戦力になって欲

しい、と思わないかね？」

「……了解しました。では行ってまいります」

「うむ、健闘を祈ってるよ」

「失礼します」

リンドウが出て行くのを確認してから引き出しから無線機を取り出す。

「私だが首尾はどうだね?」

「ザザ・・はい、予定通りです。ディアウス・ピター一頭とプリティヴィ・マータ五頭を追い込みました。・・よろしかったのですか?」

「何がだね?」

「旧市街に追い込むことです。極東支部の近くに複数の禁忌指定種を集めるなんて危険すぎます」

「・・安心したまえ。腕利きの神機使い達が待機している。装甲壁に傷一つつかない内に終わるだろう。君は引き続きアラガミ達が進路を変更しないように、監視したまえ」

「了解しました…」

ヨハンは無線機をしまつて、近くにある受話器を取ると
すぐさまエントランスへ電話する。

「ヒバリ君、任務名『蒼穹の月』を取り下げて欲しいのだが・・・」

「え、あ、あのー……支部長、もう深夜さんが受けてしまいました・・どうしまし
う?」

「なに?!深夜君だけか!?!」

「い、いえ。深夜さんの他にサクヤさん、ソーマさん、スズランさん、コウタさん、エリッ
クさんです」

「……分った。君は業務に戻りたまえ。私が対処しよう」

「はい、分かりました」

ヨハンは受話器を置き、つぶやく。

「……予想外だ。まさかこうなるとは……」

「……」

無線機

ヨハンの私物。

ソーマとのミッション中の交信に使っていた物を使いまわしている。

現存する物では傍受が困難なので安全性が高い。

「……」

贖罪の街

グオオオオオオオオオオオ　ドシヤ

「いえいミッションクリアー腹の足しにはなったぜ」

「いよっしやー！いやーすごかったよな。深夜とソーマがズバババツて斬りつけてるうちに俺とエリックとサクヤさんでズドドドツてやってたら終わっちゃったしな。もう敵なしだよな」

「その通りさ！僕達の華麗なコンビネーションは最強だからね！」

「ハハハハハハハハ！！」

「・・・おい、油断はするなよ」

「そうね、コウタ君、エリック君、油断し過ぎないように気をつけてね」

肩を並べて高笑いする二人にソーマとサクヤが注意した。

「はい、了解しました。サクヤさん！！」

コウタ達はサクヤに元気な返事をした後、後ろでこそそこそと話し始める。

「おいエリック、お前支部の女の子、誰が一番かわいと思う？」

「フム、極東は粒ぞろいだからね、だがあえて僕は妹のエリナを選ぶ！！」

「シスコンかよ！！」

「？なんだい、そのしすこんとやらは？」

「え!? え、え〜つとだな。シスコンっていうのはいわゆる『俺の妹が世界中の誰よりも一番かわいんだぜ！愛してる！』ってやつだ」

「なら僕は当てはまるようだね。なぜならエリナは、世界、いや宇宙一かわいいからさ。」

そう、君の妹君よりもね」

「おい、今のよく聞こえなかつたなあ。誰の妹が、誰の妹よりもかわいいだと」

「おや、じゃあもう一度言つてあげよう。僕の妹が君の妹よりもだ」

「ふざけんな!!俺の妹ノゾミが一番なんだよ!!それが世界の常識だろうが!!」

「まつつたく理解できないね!!一番かわいい妹はエリナだ!!!」

「ノゾミだ!!」

「エリナだ!!」

「うるせえ!!少しは静かにしてろ!!」

余りにもバカな口論に耐え切れなくなつたソーマが怒鳴る。

「なんだよ、ならお前はどうかなんだよ。ああ。ソーマ」

「・・・バカと馬鹿話をする気は無い」

「なんだと!人を馬鹿にするのもいいかげんにしたまえ!!」

「そうだお前深夜さんとはどうなんだよ!」

「なぜここで深夜が出てくる!?!」

「おいおいソーマ。君、深夜君とは長い付き合いなんだろ。何か一つくらいあるんじゃないのかい?」

「だまれ、殺すぞ」

深夜の神機

深夜は神機を使わなくても自分でオラクル細胞である程度戦うことが出来る。ではなぜ頑なに神機を使い続けるのかというと、楽だからだという。

深夜の体内には分裂することで何も取り込んでいない純粋なオラクル細胞を作り出せる器官があり、そこで作り出した物を外に出し使っている。

外に出すまでそれなりに時間が掛かるらしく、出来れば外に溜めておきたいなくと思つて容器になる物を探したそうだ。

そこで、リツカに『中身を抜いた神機を使つたら？』と言われ試してみるとハマツたらしい。

今では無ければ集中出来ないほどに気に入っている。

視点へリンドウ

今回の特務はアリサと共にヴァジユラを狩る、はずだ。

だが・・・

「嫌な予感がするな・・・」

妙にザコが少ない。

普段ならうじゃうじゃと沸いてきて手を焼かせるのに今日はまだ二匹だ。

しかもその場から動けないコクーンだけ。

心なし小物（オウガテイルよりも小型の危険性の少ないもの。鳥や虫など）も少ないように感じる。

「こりゃあいよいよきな臭くなってきたな」

E地点に差し掛かった時、聞き覚えのある声が聞こえた。

建物に隠れながら見てみるとあいつらがいた。

疑いたくないが念のため気づいていない振りをして近づく。

「何?」

「おまえら?」

来てるのは第一部隊の残り全員。

「あれ、リンドウさん何でここに!?!」

「どうして同一区画に二つのチームが・・・どういうこと?」

・・・何も知らないようだな、少し安心した。
いったい支部長は何を考えてやがる。

「考えるのは後にしよう。さっさと仕事を終わらせて帰るぞ、俺達と深夜は中を確認お前らは外を警戒、いいな」

深夜とアリサを連れて教会に入る。

「ねえ、リン兄の獲物はなんなのさ？」

「ん、ヴァジユラだ」

「へ？もうアタシ達が殺ったよ」

「まだ居るんじゃないのか？」

「いや、もうヴァジユラらしい気配は・・・ん？」

「なんだ、何か居たのか？」

こいつは何度も食ったことがあるやつならコア反応で大体の位置が分るらしい。

結構当たるんだが・・・。

「ヴァジユラっぽくてヴァジユラじゃないのがこっち来てる。数は三！」

「何だ?!」

なんだそのあやふやな答え!?

その時教会の窓に青い影が降り立った。

そいつは確かにヴァジュラに似ている・・・プリティヴィ・マータだ。

「くっさがれ!!アリス後方支援を頼む!!」

「アタシが囿やるからリン兄アタックお願い!」

「まかせとけ!」

さてと、アタッカーやるならコレだな。

ブラッドサージの横にぶら下がっている紐を引く。

ガチンという何かが噛み合う音と共にサブモーターが爆音を鳴らして起動した。

「うおらああ!」

深夜を狙っていて隙だらけのマータの前足を切る!

普段なら切れんだろうがブースト中なら・・・いける。

ギヤリギヤリと音を立てながら右前足を半分程切られマータがバランスを崩す。

「深夜!」

「おりゃあ!!」

深夜がマータの背中に乗って神機を突き刺し、さらにインパルスエツジを撃ち込み爆炎が背中を焦がす。

相変わらず派手にやるのが好きなヤツだ。

順調なんだが、なぜか援護射撃が来てない。

「アリサ、どうした!」

「リン兄!アリサが座り込んで動いてないよ。なんかやばそう」

見るとアリサが虚ろな目をして座り込んでいた。

・・・嫌な予感がする。

「!くそつ、何が起きてんだ、よっ!」

マータが深夜を背中に乗せたまま嘯み付いてきたので咄嗟にシールドで防ぐ。

アリサの事を頭の隅に追いやり、敵に集中しようとした時、

「いやあああ!やめてええええええええ!!」

天井が爆発した。

.....

ブースト

リンドウのブラッドサージに付けられたオポジション。

京也考案、楠前整備班班長（リツカの父）製作。

使われているのはオラクルエンジンの前身。

『燃費が激しいならアラガミを切るだけで補給できる神機に付けてみようぜ』という発

言から始まった。

スイツチがなぜ紐なのかは、京也が当時チェーンソーが出る某スプラッタ映画にはまっていたから・・・ならしい。

モーターによって回転する物にしか取り付けられない。

ちなみに駆動音はハンパなく五月蠅い。

|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|

視点へソーマ

・・・何かが崩落した音がする。

「・・・エリック、弾幕が薄い」

「了解した！」

爆音を聞きつけてサクヤとスズランが教会に入っていく。

すると・・・

「あなた・・・!! いったい何を!!」

「違う・・・ちがうの・・・ぱぱ・・・まま・・・私、そんなつもりじゃ・・・」

と聞こえてきた。

クソツいつたい何がおきてやがる!

「おいつ！そつちで何があつた！答えろっ!!」

「アリサさんが天井に誤射したようです！教会の中にリンドウさんと深夜さんが閉じ込められています!!」

何?!深夜がだと！

「・・・スマンエリック。五分離れる。持ち堪えろ」

「え!?!・・・了解した、死守して見せよう」

教会に入ると座り込んだアリサとサクヤがいた。

「深夜は!?!」

「瓦礫の向こうにいるわ」

「分った」

深夜に話しかけてみる。

「大丈夫か!?!」

「ん、まあ生きてはいるよ。そつちは?」

「被害は出ていない。・・・だが時間の問題だ・・・」

「分った・・・リン兄!交替!次、リン兄の番!」

「了解!おりゃ!怯みやがれ!・・・サクヤ、聞こえるか?」

「リンドウ!」

「命令だ！アリスを連れて撤退しろ！」

「でも」

「聞こえないのか！アリスを連れてとつとアナグラに戻れ！サクヤ！全員を統率！

ソーマ、退路を開け!!」

「リンドウも早く!!」

「悪いが俺達はちよつとこいつらの相手して帰るわ・・・頼りがいのある相棒がいるから
そう掛からんだろ・・・配給ビール、取っておいてくれよ」

「ダメよ!・・・私も残って戦うわ!!」

「サクヤ・・・これは命令だ!!全員必ず生きて帰れ!!」

「いやあああ!!」

「サク姉!大丈夫、アタシがいるからさ・・・地獄からでも帰ってくるよ・・・ソーマ、
パパの研究室掃除しといてくれない?」

「・・・自分でやれ。・・・帰ってきて自分でやりやがれバカヤロウ!!」

・・・バレバレ、なんだよ。

「あはは、信用されてないなあ・・・二人で一緒に帰るよ、だからアタシ達に背中任して
帰って!」

「皆さん!!こちらはもう限界ですつ!これ以上時間を掛けると手遅れになります!」

クソツ向こうは限界か。

「……………帰るぞ……………」

「……………でもつ、リンドウがつ!」

「サクヤ!!……………帰ったら、大事な話がある。待っていてくれ」

「……………分ったわ……………必ず、必ず帰ってきてねリンドウ!!」

「ああ……………ほら、早く行け」

……………クソツ!!

……………

視点へリンドウ

数十分後

「……………行ったか」

へりの爆音が去るのを聞き終えてから、俺は言った。

「プリティヴィ・マータを倒して十分ほど経った。」

「で、どうするよ……………とりあえず壁食らって外に出る?」

過去を話し終わった深夜が聞いてくる。

「あくコレ吸い終わったら考えるわ」

「ムくまた吸ってる・・・生きて帰ったら禁煙に挑戦してみたら?」

深夜がふざけたことを言う。

「それ、俺に得など何も無「サク姉はタバコやめて欲しいって」いな・・・考えてみるか、・・・こいつら殺ってからな」

教会の窓に二匹のアラガミが立っていた。

さっきの青いのと見た事が無い黒いのがいた。

「うへへへ、あれってデウマウス・ピターとかいうやつじゃないの?」

「知ってるのか?」

「んにや、始めて会った。だけどパパが一度やりあつたらしくてさ、頭が弱いって」

「そりやめんどくさそうなヤツだな・・・おっしや、いっちよやるか」

意識を戦闘に切り替えてモーターを動かす。

「うおりやああああ!!!」

グオオオオオオオオオオン!!!!

・
・
・
・
そして、俺達は、一度、死んだ。

追憶の彼方

教会

視点〈深夜〉

結局、ソーマ達が帰ってからすぐにプリティヴィ・マータは片付いた。

その後マータを食べていた時

「なあ、『アーク計画』って聞き覚えあるか？」

とリン兄が聞いてきた。

「へっ？何でリン兄が知ってるの？」

「!!お前何か知ってるのか!？」

「う、うん。八年ほど前にパパとヨハンおじさんがしゃべってるのを聞いたことがあるけど……」

「京也さんもあっち側だったのか……」

「い、いや〜どつちかっていうと反対してるっぽかったよ」

「……『アーク計画』の内容は憶えてるか？」

「ん〜つとたしか……」

ここから先は回想。

八年前、アタシが七歳の時のことだ・・・

|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|

八年前の第一部隊メンバー表

隊長：荒崎あらさき京也きょうや（40）死亡

副隊長：羅法らのり道彦みちひこ（27）現第四部隊隊長

以下隊員

陳チエン張偉チャンウエイ（32）死亡

アイゼア アスター（26）死亡

雨宮あまみや椿つばき（21）現第一〜第三統括司令官

雨宮あまみや竜胆りんどう（18）現第一部隊隊長

|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|・|

七年前、アタシまだ八歳で神機使いになる一年前・・・のはず。

その時は、パパを探していて、ちょうどパパが支部長室に入っていていくのを見て追いかけていったんだけど。

・・・・え？なぜアタシが役員区間にいたかつて？・・・覚えてないわ。
とにかくパパを追いかけていったの！

中ではもう話しが始まっていて・・・まあ、気になったのよ。

廊下で見たパパの顔がすごく怖かったから。

ちようど扉に手帳が挟まって隙間が開いたので、張り付いて聞いてみると・・・。
「なあハス、今俺さあ、すつごく気になることがあって夜も眠れねーんだけど、教えてく
んねえ？」

これはパパの声。

ハスっていうのはヨハンおじさんのあだ名。

ヨハネスでハスなんだってさ。

「ハスと呼ぶのはやめてくれといつも言っているだろう。・・・で、何が気になるんだ？」
こっちがヨハンおじさん。

『ARK PROJECT』

「!?・・・何処でそれを聞いた」

「本部のお偉いさんに勧誘と小言を聞いている時にな『京也君、本部に来ないかね？君ほ
どの者を極東なんてところにおいて置くのは宝の持ち腐れだ。設備も費用も全てこち
らが負担しよう。どうだ？』『何回も言ってますけど嫌です』『何時も何時も何が気に入

らないんだ?』『アンタの全て』『キ、キサマ、大体いつも君は・・・』(説教中、めんどくせえ)『・・・と、もうこんな時間か。京也君、そちらの支部長に伝えてくれないか。ARK PROJECTについて話があると』ってな。

どうやら俺も関係者だと思われたようだが・・・コイツは何なんだ?

またマーナガルムみたいなこと企てるんじゃないだろうなあ?」

「・・・・・・・・・・」

京也、もしエイジス島を完成させたとして中にどれだけの人を収容できるか分かるか?

エイジスの装甲がどれだけアラガミの攻撃に耐えられるか分かるか?

食料プラントの稼働限界まで何年あるか分かるか?

エイジス島に人口限界が訪れるまだ何年あるか分かるか?

・・・人類は、果たしてどこまでのあいだ神に抗うことができると思うんだ?」

「・・・・・・・・・・」

「収容できるのは多く見て十万人、装甲は現在のアラガミを元に計算してよくて二年、食糧問題までに五年、それを避けたとしても人口限界までは三十年あるかどうか。」

タイムリミットまでにアラガミに対しての打開策が見つかると思うか!」

「・・・・・・・・・・」

「どう考えても不可能だ。」

意味の無いことに時間と資金をかけるのは馬鹿馬鹿しい。

だから私は、僅かな確率だが成功すれば確実に人類が生き残ることが出来る方法を考えた」

「それが『ARK PROJECT』なのか？」

「ああ。この世界を食う神々を、世界と共に全て洗い流す唯一の方法だ」

「……一つだけ聞かせてくれ」

「……許可しよう」

「それは、すべてのアラガミが、死なないと駄目なんだな？」

「?何を馬鹿な事を言っている。当たり前だろう」

「なら、俺は賛成できん」

「なっ!?なぜだ京也っ?」

「その場合、深夜も死ななきゃならねえだろうが」

「その必要は——」

「無いって言いたいのか? 忘れたのかよ。残念なことになあ、深夜は限りなく人間に近しいとはいえどオラクル細胞の体を持つアラガミなんだよ。」

たとえば深夜は大丈夫でも死んだ時にオラクル細胞が飛散したらどうなる?

凝集して新たなアラガミになるかも知れねえだろ。そしたらまた元の世界へ逆戻り、

だ」

「……ならば、お前はとうするつもりだ」

パパが黙り込んだ。

「……………ククツ、そうだなあ、人類の中にアラガミを取り込むつてのはどうだ？サカキみたいに共存するわけじゃなく、医療や食料、防衛機器や兵器として利用するためにな。もちろんアラガミ化だとか問題は残るが、アラガミ化したものを元の形に戻す技術があれば成立するよなあ」

「まさかお前はっ——」

「あーすまねえ、腹すいたわ。ちよっくらメシ食いにいつてくる。続きはまた今度な。」

「おい！待て京——」

「あ？俺の手帳が挟まってんな、あぶねーあぶねえ。秘密の手帳を見られたら困るからな」

パパが支部長室から出てきてアタシを見つける。

「んんん？深夜。何時からそこに居たんだ？」

「えっつとね、さつきツバキねえにパパといっしょに帰ってきたって聞いたからさがしにきたの」

「おんんんありがとな深夜。パパはすごく嬉しいぞ。……じゃ、深夜の好きなも

のを食わしてやるぞ?」

「ほんと!?じゃあ、おうがているのしつぽとー、こくーンめいてんのぐにぐにしていると
こー」

「コクーンメイデンな、切尾と弾性体か、通だなー」

「つうなんですよー。えへへ」

「うん。ほんつとに可愛いな。とても俺の娘とは思えん」

・・・・もう止めていい?

これ以上続けると恥ずかしさで死にそう・・・。

つていうか何で関係無いとこまでしゃべってんのアタシ?

ー・・・ー・・・ー・・・ー・・・ー

京也の手帳

京也が肌身離さず持っていた謎の手帳。

四年ほど前に深夜がチラ見したページには、ラットを使った捕食逆行実験と書いてい
たらしいが?

ー・・・ー・・・ー・・・ー・・・ー

「・・・なんで今まで黙ってたんだ。こんな大切なこと・・・」

「だってすっかり忘れてたんだもん」

リン兄に言われて思い出したんだよ？八年前の事なんか憶えてるかかってんの。

「しかし世界を丸ごと・・・か。ったくともない事考えてたんだな」

「うん・・・あ、ヘリだ」

最速最音の問題機、フェンリルホークの爆音が聞こえる。

しばらくの間、音に気づいたアラガミにソーマ達が襲われないかと気が気でない時間が続く。

そして音が去っていき・・・。

「・・・行ったか」

死闘の幕が開ける

悲しみに濡れた、月が静かに――

教会

あの後、激闘の末に2匹を撃退（捕食のための逃走）することができた。

それから休憩をはさんで現在、深夜は教会から脱出するために教会内部であるG地点からI地点に繋がる穴を食べて作っている真つ最中である。

「やっべ・・・回復錠改残り二つしかないな・・・深夜、すまんが余ってたら分けてくれねえか？」

リンドウが神機のジョイントを確認しながら聞いてくる。

先程長時間連続でブーストを使用したせいでガタがきているようだった。

「いいよー、さつきは喰べて回復したから一個も使っていないし半分あげるよ。ここに置いておくからねー」

「おうサンキューな。あと出来ればスタングレネードも・・・」

「ハイハイ。まとめて置いておくよ」

「おう。あんがとさん。――ちつ、シールドの展開速度も落ちてるか、今回のミツシヨン帰ってからメンテに出すはずだったからな、サクヤの言う通りにもっとこまめにメン

テしとけば良かった・・・」

そうして準備を整えながら十分ほど掘り続けているうちに壁が崩れてI地区と繋がる。

「よっしやーつながっ・・・た?」

土埃が収まった深夜の前には大きな黒いオツサン顔があった。

どうやら壁を挟んだ地点で捕食していたようだ。

「へ?・・・うえええええええ!!」

突然の事態でも神機を突き出せるのはさすがだったがあえなく防がれてしまい・・・

「なっ!?!」

神機を銜えられて、

「うっそおおおおお、うぐう!つあああああああああ!?!」

後ろに投げ飛ばされ壁にぶつかりながら転がっていった。

「おいどうした!?!何かあったのか深夜・・・あ?」

この時のリンドウの気持ちに分かるだろうか。

先程まで妹分がいた空間に大きなオツサン顔が、あったのだ。

少しの間、見つめ合い。

グオアアアアアアアアアアアアアア!!

「うおおおおお!? なんじゃこりゃああああ!?」

デュアウス・ピターはリンドウを標的に定めたらしく壁を崩しながら突っ込んでくる。

突き出された爪をよけながら態勢を整えるが、

「……閉じ込められたな」

この教会に元あった出口は大岩に塞がれ、深夜が掘った出口もピター帝が立ち塞がっている。

外から打ち破られたせいで大小様々な瓦礫が散らばっている中、相手の攻撃を避けながら無傷——どころか腕一本を犠牲にしても脱出できる気がしなかった。

「さすがにやばいか、せめて深夜が戻ってくるまでは持ち堪えねえとな」

——しかし手持ちの道具は回復錠12、改が5、グレネード4にホールドラップ1、後御守り代わりの神薬1本か。一人で接触禁忌種相手に立ち回るには少し心許ないな。

「ま、やるしか無いか」

「……………」

C、D中間地区

「あー目が回る、くっそー、なんで開けた穴にピターがいんのよ? って」

壁にぶつかった後、かなりの勢いで地面を転がっていったのに目を回す程度で済むのはさすがだろう。

ともかく起き上がりながら辺りを見渡す……までも無く分かるほどに囲まれていた。「うえ、マータが三匹……参ったねこりや」

三匹共暫くの放浪生活で満足に食事出来なかつたからか、久々の食糧を逃す気など欠片も無さそうだ。

「早く戻らないとリン兄がヤバいけど簡単に逃がしてくれそうにないな」と

三匹がそれぞれ近接、遠距離、援護と役割を分担しながら襲ってくる。

考えてやったのではなくおそらく本能なのだろう。

爪攻撃に氷塊連弾、それを避けた隙をつくフライングプレスをいなしながらも適格に急所を神機と触手で抉っていく。

「んっふっふー、この調子でさっさと片付けて……あり？」

余裕そうに走り回っていると突如足が止まり態勢を崩しかける。

見てみると足が氷で縫い止められていた。

三匹の内一匹が仕掛けた罠に足をつ込んだようだ。

その隙を逃すほどマータも甘くない。

「うっげまっげー！」

三匹に同時に襲ってきた。

・・・・・

F、J中間地区

老朽化したビルのシャッター前にオウガテイルの死骸が転がっている。

こういった小型アラガミの死骸にはよく小物が集まりやすい。

この時もそうだった。

だいぶ分解されたオウガテイルの腹部にたくさんの小物が群がっている。

犬や猫、鳥などや昆虫類まで多種多様なアラガミがあるとあるアラガミを中心にだ。

そのアラガミはとても小さい。

体長十五センチほどの糸状の生き物。

ミミズ、である。

小さくとも、その体は薄く赤く不思議な間隔を置いて発光していた。

その発光のリズムが変わるごとに周りの取り巻き達が場所を移りミミズを守っている。

まるで周りを操っているようだった。

そこに突然、大きな白い顔が覗く。

先程リンドウと深夜から逃げてきた個体だろう。

少しでも早く回復しようとするマータは逃げ惑い、或はミミズを守ろうと牙をむくアラガミ達をミミズごと食べてしまった。

ついでに半壊したオウガテイルも貪り、その場を去っていく。

この時は何事も起きなかったがこの後、このマータは極東支部を脅かす程の脅威となるのだがそれは置いておこう。

兎に角、奴はその怪しいミミズを捕食したのである。

一番初めの変化は二十分後だった。

大地を赤く、赤く染めて消える――

フエンリル・ホーク機内

バン！という音と共に扉が開け放たれ、あまり広くないヘリの機内が暴風と爆音に晒された。

「お、おいソーマ!!そんな事したら――」

「危ないですから下がって下さい。ソーマさん!」

コウタとスズランが必死に呼びかけるのを無視して、ソーマはヘリのステップに足をかける。

「五月蠅い、・・・俺はもう、深夜を置いては・・・いかない。そう・・・決めた」

「ソーマさん!!!」

蒼穹の空に、紺色のコートがはためきながら落ちていった。

――

空を落ちていくソーマ

この後、真下で第二部隊と交戦中のクアドリガをクッションにして着地。

衝撃でクアドリガを押し殺し、呆然とする第二部隊からジープを奪い取り、贖罪の街へ向かった。

ちなみに無傷。

愛つてすげえ。

| · · · | · · · | · · · | · · · | · · · | · · · |

教会、

戦闘開始からもう二十分はたった。

教会内は血の池と化していた。

そのほとんどはピター帝のものだがリンドウのものも含まれている。

たかが二十分の戦闘だが、その二十分は戦う者にとっては二時間に等しい。

その極限状態の中、連戦して疲労している体では全ての攻撃を避ける事は出来ず、身
体中傷だらけになっていた。

「はあ、はあ」

(· · · 寒い · · · 視界が霞む · · 手足の感覚が無い · · 今にも倒れ込みそうだ · · · これ
はさすがに死ぬか)

既にリンドウの体力は限界だ……だが、

「まだ……負けるわけには……サクヤに告白するまで死ぬわけには、いかねえんだっ!!」

今にも倒れそうな体を気力と未練で支えていた。

（策も道具も尽きた、だが「これで決める!」

震える指で神機の紐を引き、ブーストモーターを起動させる。

「う、おお……おおおおおおおおおおおおおおっ!!」

力が入らない腕で激しく振動するブラッドサージ^棒を必至に構え、今まさに喰らいつかんとするピター帝の口内に向けて突き出す。

ピター帝の顎や口腔を切り裂きながら突き進み、ズギヤギヤギヤ!!と音を立て、モーターによって数倍に速度を上げた鋸刃がピター帝の体内を蹂躪する。

「こ、れ……で……終わり、だあああ!」

身悶え暴れ回るピター帝に気力と根性で食らい付き、ブラッドサージをより深く刺していく。

あと少してコアに届く……はずが異音を鳴らしながら急に回転が弱まり、肉に引つかかかって回転が止まった。

「なっ、っ、これは……」

かつて経験したことがある、エネルギー切れによる急停止で歯車が変な形で噛み合った時に起きる異音だ。

つまり……。

「お、おかしい……OPは感覚的にはまだ余裕があるはず……まさか……」
血を失いすぎたことで感覚が狂っていた、という事。

そして体内の蹂躪が止んだため正気に戻ったピター帝はまず、自分の口から飛び出している異物を撤去するために口を閉じる。

当然、神機と共にピター帝の喉に突っ込んでいたリンドウの腕を噛み千切る形で。

「ぐおおああああああああああああアアアアッ!!」

神機と共に右手と腕輪まで持っていかれてしまい悲鳴が口から漏れる。

だがまだ終わらない。

腕輪の制御を失ったことで傷口が急激に再生しようとして身体中に激痛がはしる。

オラクル細胞の活性化に体細胞が耐えれないからだ。

暫く耐えたものの、やがて精神にも限界が訪れ、視界が白く染まっていく。

(サクヤ……すまん。帰れそうに、ない………しろ……しろい、
しょうじょ?)

そして、リンドウは倒れた。

――
赤いミミズ

贖罪の街にいた赤いミミズ型小物アラガミ。

一見、感応種のように偏食場を使っているように思えるが、実はフェロモンに近い。ブラック・ブレットのアルデバランみたいなつ。

とあるプリティヴィ・マータがこれを喰らい同様の能力を身に付けた模様。

――

その頃の深夜。

「つ、疲れた。きつついよ〜」

戦い初めて二十五分、ようやく一匹目を倒し終えていた。

「三匹同時はさすがにやばいつて〜。でも、後二匹!」

三者とも（内二匹はマータ）満身創痍になりながらも睨み合いを続けている。

と、そこで深夜は教会からリンドウが出てくる気配を感じた。

「あ、リン兄? ヘルプミ・・・イ?」

流るる血潮は、命の光——。

初めてアタシが暴走した時は、オラクル細胞を作り続けてまるでアマーバの様になって周りの物を食べ尽くしたらしい。

今思えばあれは、パパを殺したスサノオに復習する力が欲しいという願いから生まれたのだろう。

ものを喰らって全てを力に変える事で・・・そのスサノオを殺すために。

ならばリン兄を殺した奴らに対しての、殺意が形になった二回目は——

プリティヴィ・マータ達は黒い塊になった深夜を警戒し距離をとっていたが、動きが全く無い状況に耐え兼ねその内一匹が黒塊に手を出そうと爪を振るう。

その爪が表面に触れる瞬間、黒塊の中から人の胴程の太さを持つ腕が生えマータの頭を鷲掴みにし更に握り潰した。

頭を失い倒れ込む相方を残った片割れが啞然と見守る中、腕の持ち主が姿を現す。

それは、穴の空いた手を持ち、腕甲に砲を装備し、全身を鎧の様な皮膚で覆い、節くれ

捻じ曲がった角を生やし、王者の様なマントを纏い、騎士の槍の様に鋭い尾を振るう、竜と人を足して割ったかのような体格の黒い化物……暴走し殺意に身を委ねた深夜の成れの果てである。

この姿は今迄喰らってきたアラガミの中から強いと感じた部分を集め、戦いやすいように形を整えたもの。

故に既存のアラガミと共通するものが多い、鳥神の手、龍種の砲、騎士の鎧と蠍の尾、獣神の翼、混沌の角、目に見えないものに猿神の聴覚、戦王の熱探知器官とトマホーク。

ちなみに姿がやけに真竜ハンニバルに似ているのだが、実はこの時暴れ回り飛散した深夜の細胞がハンニバルの起源と言われている……だから似ているのも当たり前、何せ生みの親なのだから。

黒い竜人は足元でもがくマータに止めを刺し（ヴァジュラ神属のコアは胴にあるため頭を破壊されても死なない、ただし目や鼻といった感覚器官が無いので立つ事も出来ないが）残されたマータを見る。

流石に命の危機を感じ逃走を試みるものの、竜人の角から放たれた白光が胴体をあつけなく蒸発させた。

ウロボロスは混沌角に混沌闇晶を含んでおり、そこに溜めこまれたエネルギーを一気に放出する必殺技『ウロボロスカノン』を持つ。

つまり混沌角をモデルにした竜人の角から放たれたものは『疑似ウロボロスカノン』、深夜のエネルギーを元に放たれる超弩級アラガミの必殺技はそこんじよらの第二禁忌指定種程度に耐えられるものではない。

コアと体の半分近くを失いバラバラになるマータから視線を外し、次の獲物を探す竜人の目に傍らにリンドウを喰らったピターを従えビルの屋上から竜人の様子を眺めていた赤い翼を持つ女帝の姿が映る。

思考を怒りが染めていてまともな判断できない頭でも流石に諸悪の根源ぐらいは判別がつくのか、ピターを見つけると大きく咆哮し一直線に駆けていく。

そんな周りが全く見えていない竜人に横槍、いや、横投げ槍が入られた。

目を向けると横にあるビルの隙間、そこにコクーンメイデンが冗談抜きでぎっしりと詰まっていた。

お互い動きづらそうに、だが何かに憑かれたかの様にレーザー、ジャベリンと狙撃を繰り返している。

竜人は煩わしそうにしながら腕甲の砲で対処した。

砲から撃ち出された火球が群れのと真ん中に着弾し、高いビル壁に阻まれた業炎と爆風が繭の妖精を根こそぎ焼き払い千切り飛ばす。

相手を考えずに喧嘩を売る不屈き者を火葬して視線を元に戻すと白と黒の集団が視

界を覆い尽くしていた。

どうやら街の地下や瓦礫の影に隠れていたオウガテイルやザイゴートがなぜか集まって来ているようだ。

構わず進もうとすると無視するなど言わんばかりに噛みついてくる。

ダメージは特に無いが噛み付きや空気弾を続けるザコ共はそれはとても鬱陶しく、爪で道を切り開こうとも空いた空間に次から次と溢れ出し、キリが無い。

それでもしばらくは我慢していたのだ、だが地面に転がる死体が三十を超えたあたりで限界がきた。

一咆えして背中を覆う黒いマントにエネルギーを流し、電撃へと変換して放つ。

落雷を軽く凌駕する青白い大蛇が空気中の塵と足元の血液を媒介に猛威を振るい、体の芯までもを焼き焦がす。

白かったものも元から黒かったものも等しく真っ黒焦げになりボロボロと崩れ去った。

ようやく前に立ち塞がる邪魔者をすべて片づけ向き直ると丁度、赤マータがピターを引き連れ向こう側に飛び降りていく姿が目に入る。

頭に血が上がるどころか沸騰している竜人は『深追いは禁物』という鉄則さえも思い出せず、進行方向にある壁をブチ破りながら追いかけていった。

貪食の窪地

贖罪の街から数キロメートル離れたところにある巨大なクレーター。

現在アラガミが捕食して出来た物のなかで一番巨大で半径五キロに及ぶ。

その大きさから超弩級アラガミの捕食跡と推測されているが詳しくは不明。

何故かアラガミは近づきたがらないため遠征中の休息地として使われている。

稀に強力な大型アラガミが入り込み、討伐任務が出されることがしばしば。

コンテナや仮設テントといった物を除き遮蔽物は無く、アラガミと直接対決することを強いられる。

「おい深夜何処だ！返事をしろ！」

贖罪の街に引き返して三十分、深夜のことなら外に脱出しているだろうと思っていたが深夜の姿が見当たらず街を探し回っていた。

まだ閉じ込められているのかもしれないと教会を見に行くとまだ入口を瓦礫が塞い

でいる。

「リンドウー生きているなら返事をしてくれ！」

自力では教会の入り口の瓦礫を撤去できず、中に呼びかけてみたものの返答は無く気配も感じない。

次に何処かに横穴を作った可能性を考え教会の周囲を周って半周、深夜が空けたと思われる穴と大きな異常を見つけた。

「……………何が……………あつたんだ……………？」

そこには道を作るかのように続く小型アラガミの死体とビルにあいた大きな穴。その先を確かめようと穴をくぐり曲がり角を曲がった瞬間、地獄に立った。

地面、壁を塗り尽くす黒と赤。

視界のほとんどを遮る霧のような黒。

アラガミが喰らったクレーターを満たす赤。

無造作に転がっている裂き傷や喰いちぎられたような痕が目立つ黒い塊。

恐らく深夜が無数のアラガミを薙ぎ倒していった後なのだろう。

地面や壁を染めて上げているのは融け崩れたオラクル細胞と鮮血。

視界を遮っているのは結合崩壊し空中を舞うオラクル細胞。

クレーターを満たすのはアラガミが流した多量の血。

転がっているのは崩れ始めたアラガミの遺骸。

どれも戦っていると自然と目にする光景だ。

ただ、規模が異常なまでに大きい。

それらが遙か先視界が届く範囲全てを埋め尽くしているのだ。

十そこそこでは足りない。

何十、何百ものアラガミを血祭りにあげなくては此処までには至らない。

一つ進んでは殺し二つ進んでは殺す。

ひたすらひたすら殺して進みまた殺す。

進む道を塞ぐ輩を目に付く奴を、

殺し続ける。

とても正気では行えないような所業。

この先に何が広がっているか不明だが深夜の事が心配だ。

死体を踏みしめ赤い水面を歩くように進む。

進み続けているとアラガミの死体が少しづつ大きくなっていることに気がつく。

まだ新しいだけではなくアラガミが大きくなっているのだろう。

比較的原型が残っているものの中にボルグ・カムランらしきものが見えた。

更に進むと赤黒い水面から僅かに覗く妙に見慣れた気がする白い物が目に付いた。

掴み上げると・・・人の腕だった。

傷口は無理矢理引き千切られた様な痕。

持っているとズルリと皮が剥がれ落ち黒いオラクル細胞組織が顔を出す。

間違ひなく深夜のものだ。

嫌な予感しか感じられない。

歩いていられず走り出す。

そして大きくひらけた巨大なクレーターのような場所で——

——深夜を見つけた。

「・・・・・・・・あ？」

深夜には手足が無かった。

服を含め全身スタボロになり赤いマントを持つプリティヴィ・マータに押さえつけられてる。

傷口が緩やかに蠢いているので死んではいないようだ。

だが此処まで再生力が落ちているという事は・・・。

「・・・・・・・・ん・・・・・・・・?・・・・・・・・ソー・・・・・・・・マ?」

薄く開けられた目がソーマをとらえた。

一瞬嬉しそうな表情を浮かべ悔しそうな顔に変わる。

そして申し訳なさそうにソーマを見て・・・・そして

肩から上を喰いちぎられ、咀嚼せずに飲み込まれた。
視界が赤く、赫く染まる。

思考がぐちゃぐちゃになりなを「一つああああああああああああああああああああ
あああああ!!!」^{叫んで}さけんでいるのかもわからなくなる。

何も考えずただ前にいるかたきを、

敵を討つために手に馴染んだ
てきをうつたためにてになじんだイーブルワンを持ちあげ構える。

自分^{自分}が操作^{操作}でできる^{できる}限界^{限界}までの
じぶんがそうさでできるげんかいまでの
の黒い^{黒い}刀身^{刀身}に流^流し込^込む。

見る^{見る}見る^{見る}うち^{うち}に刀身^{刀身}を
みるみるうちにとうしんをチャージクラッシュの^のような^{赤黒}あかぐろい^いひかり^光が^がまとい、

さら^{さら}に^に黒く^{黒く}トス^{トス}黒く^{黒く}染まり^{異音}、いおん^音をは^放ち^始める。

さら^{さら}にくろく^く、ど^どすぐろく^くそまり、いおん^音をは^放ち^始める。

漸^漸く^く気配^配に^に気づ^づき^きせん^{戦闘}たい^態せい^勢をと^とろう^ととする^{する}プリテイヴィ・マータ

に^に向^向か^かつて^てイーブルワン^をを^振る^るい^いその^首く^へび^とへと

過去を夢見て

——過去、七年前——

頭の上に広がるのはもう見慣れるどころか見飽きてしまった白い天井。

シミ、キズ、飛んだ血痕に配水管から漏れた雨漏りの跡まで絵に描けるほど刷り込まれてしまった（実際に描いてみると自分では上出来だったのだが父やペイラー、京也さんに爆笑されてしまった。・・・絵は苦手だ）人工の空の下に俺は今日も来ていた。

「いたつイタタタタタ！くっそ、ちよつとは優しくしろよららみ！」

「ああ！うっさいガキが。優しくしてもらいたいなら此処に来る回数減らしな。毎週三回は来やがってこのヤロウ。周りの目をごまかすために投薬しなくてもツバつけりや治るつてのに無駄に薬を出さなきゃならないんだぞ無駄にな。金の痛みを負えないならせめて体の痛みくらい我慢しやがれ」

体に巻かれた包帯を取って薬を塗りたくっているのは神かみなし為ららみ。

十五のくせにゴッドイーターでなぜか趣味で医務室で看護婦を兼任する性格がクツソ悪いババア——

ゴスツ！

「イツテエ！てめっなんで殴るんだよ。お前看護婦だろ！」

「バカガキ殴るのは治療の内。あと看護師な、オレはまだ十五だ婦なんてつけんなこのバカガキ」

もう治りかけている三日前の裂き傷に薬を塗り包帯を巻きなおす。

「おら、終わったぞ。これに懲りてもう防壁外に出ようとすんなよ。お前があくまでアラガミのなりそこないみたいなものだから生きてるだけで常人なら即死だったんだぞ。もしまた外に出ようとしたらあのババア達に手当させてやるからな。陰口を目の前でたたかれながら治療されんのはいやだろ？」

「・・・そりゃあ、いやだけど」

ららみはゴッドイーターの中でも再生力が異常に高いからか、或いはバカだからなのか周りに化け物と言われていた俺にも普通に接する数少ない人間だ。

性格と口が悪いが一応信用してる。

「おっと、忘れてた・・・っと」

呆れたようにこつちを見ていたららみが、急にバッグを探りだした。

ちなみにコイツのバッグは一抱え程の医療ボックスだ。

中身の三分の二は当たり前だが医療品。

いくら私物が少ないからってそんな所に一緒に入れなくてほしい。

衛生処理はしてるっていつでも……なんか……なあ？

「ほれ、プレゼントだ。深夜ちゃんにあげな」

投げてきたのは親指程のぬいぐるみのキーホルダー。

ドッグタグに使われる頑丈な鎖の先に付いているのは黒髪の少女ぬいぐるみ。

どこかドヤ顔に見えるアホ面はおそらく――。

「深夜か？」

「当たり前。この前、ようやく縫い終えてね」

ニヤリ、といつも通りのニヒルな笑みを浮かべながら答えるららみ。

コイツの趣味は縫い物、正確には無駄にちっちゃい小物を特に好んでいる。

本人曰く患者の縫合で鍛えられたらしいが、看護師は滅多に本格的な治療はできないはずなので夜なべして練習したんだろう。

ガサツに見えて照れ屋で恥ずかしがり屋なのだ。

「んだよ見つめんじゃねえよ、バカガキ。目蓋縫い付けんぞ」

「怖えよ!!んな物騒な事患者にするな!!」

俺の視線が温くなっているのに気が付いたのか、キレながらとんでもないことを言い放ってきた。

照れ隠しで俺の命がヤバイ。

普通の人なら口だけで終わる冗談だがコイツの場合は無視できない。

何故なら以前、自殺志願な神機使いが自殺に失敗して入院した時、どんなに言い聞かせても死のうとするのにぶちギレ、手足を縫い付けて点滴のみで生活させてたからだ。

正確には照れ隠しではないがこいつのヤバさがよくわかる例だ。

あれはマジで怖かった。

あと前に些細なことをからかって腕をやられたこともある。

「つ、次こそは五体満足で来るからな！」

「怪我してねえんなら此処にくんな！じゃな」

いつものやり取りで別れてから周りを見渡すと・・・。

「・・・ん？」

外で待っているはずの深夜が居ない。

「・・・仕方ないな」

探すか。

ラボラトリーはペイラーのおっさんが住み着いている研究室や京也さんのアラガミ対策兵器研究室などアナグラ内の大半の研究部門が詰め込められた区域だ。

当然、他のどの区域より研究員が圧倒的に多い。

研究者というやつは研究以外の全分野においてもぐさなやつが殆どで、あまりスペースがないと言うのに大量の資材や廃品などをほったらかしにする。

それがソイツの研究室だけで済んでいるうちは無視できる、だが中には研究室だけでは収まらず廊下に放置するやつがいるのだ。

奴らのお陰でラボラトリは機材設置のための増築改装と相まって混沌とした迷路と化してしまった。

今やエレベーター前に掛けられている建造当時の地図との相似点を探す方が難しい、なんて事態に陥っている。

ゴツドイーターが頻繁に訪れなければならないペイラーの研究室がエレベーターの正面に無ければ抗議文が親父の机に山脈のように積み重ねられていただろう。

話がずれてしまった。

オレが言いたいことはここは迷路その物で、其処ら中にデッドスペースが有って中には住み着いている研究員ですら知らない隙間や空間が存在しているということ。

そういう場所はいついかなる時代においてもちよつと後ろめたい事をする子供たちの住処になるものだ。

深夜は向こう見ずで探検好きな奴だが意外なことに一人ではしたがらない。

その理由は「あたしは仲間とスリル溢れる事をするのが好きなの！」ならしい。

更にこの後に京也さんに謝りにいくのに付き合つてやる約束をしている。

だからアイツ自ら勝手に居なくなる可能性は低い。

なら簡単だ。

自分から動かないのなら誰かに連れて行かれるしかない。

そしてその予想は当たってしまった。

ラボラトリの一角。

最近心臓発作で室長が死んだため空室となつている研究室前に人影が4つ。

壁際に追い詰めた少女を囲むように三人の少年が立っている。

少女は黒髪黒目、背は同年代の女子としては高くフェンリルマークが入った黒Tシャ

ツとカーキの短パンを履いている。

どう見ても男の格好だが間違ひなく深夜だ。

そして少年は黒灰色の髪に同じく黒灰色の目そして背は微妙に低い。

顔は何処か残念というか三下と言いたくなるような。

ま、ぶつちやけるとモブ顔というやつだろう。

確か役員の一人の息子だった筈だ、名前は覚えてない。

他の二人も名は知らないが見覚えがある。

役員の息子の権力の衣を着て威張り散らし苛める悪質なグループだった筈だ。

つい最近外周区の子供に暴力振るい怪我を負わして京也さんに叱られていた。そんな奴らに深夜が囲まれている、嫌な予感しかしない。

「っ、っ、」

深夜が連中に声を掛けられている、いや一方的に詰られている？

会話を聞きたいが遠いせいで上手く聞き取れない。

見つからないように物陰に姿を隠しながら聞こえる距離まで近付いてみると

「どーした化け物。ん？何も言えねえのか？」

ズガンツ！と大きな音で気が付く。

深夜も連中もこつちを見ている。

自分の腕の先を見ると殴られ大きく陥没した壁。

どうやら怒りのあまりに一瞬理性がとんでいたようだ。

こんな目立つ事をして誤魔化せないし、するつもりもない。

どうせなら勢いに乗せて終わらせる方がいい。

「おいお前ら、そこで何をしている」

顔を少しだけうつむけ、影ができるようにする。

奴等に見えるのは口元だけ。

その口元も歪んでいるはずだ。

「ツ!?ソ、ソーマじゃねえか。なんだ、御同類でも助けに来たのか？」
声が震えている。

一瞬ビビったようだ、俺の狙いどうりに。

「俺は何をしている、と聞いたんだが」

奴の問いかけを無視して再度、更に凄味を乗せて問う。

「答えはどうした？」

「そ、それは・・・！」

答えに詰まる。

当たり前だ、目の前に鉄板へこませた奴がいて更に怒っているのだ。

俺でもビビる。

ましてややっていたことは後ろめたいこと。

直ぐに答えられる方がおかしい。

「・・・答えられないか、もういい。深夜から離れてくれないか」

自分の腕に視線を動かしながら言う。

手がめたくそ痛い。

最悪骨に罅が入っているかもしれない。

「ヒツ!?わ、分かった。今回は諦めてやる。覚えておけよ！」

「ま、待つてくださいいよ茂部さん!」

喚きながら逃げていくのを残された取り巻きが涙を流しながら追いかけていった。
成功だ。

「大丈夫か?」

壁にもたれ掛かっている深夜に声をかける。

すると・・・

ドンッ

「お?」

深夜が声もなく飛び付いてきた。

「お、おい?」

「……何も言わないで」

俺の胸辺りに顔を埋めて呟いたのが聞こえた。

「……」

何も言わずにそつと抱き締めてやる。

そうしたら俺に体を預け震えだした。

どうしたらいいのか分からないから京世さんがいつもやっているのを真似てみたの

だが、どうやら正解だったようだ。

「深夜、大丈夫だ」

女が泣いている時の対処法なんか分からないがこれは言わなければならぬ気がした。

「俺が守ってやる。あんなバカ共の心無い言葉や、意味のない暴力から守ってやる。だから・・・もう泣かないでくれ」

それから――

――現在

目を開けると白い空が視界を占めていた。

シミ、キズ、血痕に水が染み込んだ跡。

前と変わっていないように見えるが数が増えているのが俺には分かる。

「グッ……」

上半身をベッドから起こすと微かな痛みが全身に走った。

「体が痛むのは2週間動かして無かったからだソーマ坊」

声に目を向けるとららみがパイプイスに腰掛けてこちらを見ていた。

「に…、2週間…だと」

「ああ、お前はずーつと意識不明だったんだ。意識失う前覚えてつか？」

「ららみに聞かれ記憶を探る、必要もない。」

「脳裏に浮かぶのはアラガミに頭を喰い千切られる深夜の——」

「つ深夜は!!ガはッ、ゴホッ」

「2週間使っていないかった声帯が急な発声に耐えきれず咳が出るが構わず続ける。」

「深夜はどうした!？」

「落ち着きなソーマ坊。まだギリギリの所で生きてるよ」

「…どういう事だ?」

「そのまんまの意味だ。それについては後で説明してやるから待つとけ。それで聞きた

いことがあるんだが」

「……何だ?」

「今すぐ飛び起きたい衝動を堪えららみの言葉を待つ。」

「なあソーマ坊、お前…深夜ちゃんが大事かい?」

「……?ああ」

「その質問の意図が読めないが答える。」

「命懸けで死線に飛び込むほどに?」

「ああ」

「……それならいいんだ。さて、深夜ちゃんの現状についてだったな」

俺の答えに何故か微笑を浮かべ説明を始める。

どこか居心地が悪かった。

「深夜ちゃんは未だにアラガミの腹の中だ。そのアラガミは現在廃寺付近に潜伏していて、今調度救出作戦を榎先生の部屋でたててるところだよ」

「そうか」

ベッドから出て近くに掛けられていたいつもの服に着替える。

「ソーマ坊」

着替え終わり医務室のドアを開けようとしているとららみが声をかけてきた。

「最初で最後のチャンスだ、気張っていきな！」

その顔に浮かぶのは何時も通りの不敵で不遜な笑顔。

いつかのように背中を押してくれる姉御の顔だった。

「ああ、あのバカの首根っこ引き摺って帰ってくる」

「おう、怪我に気を付けろよ」

ドアを抜け廊下に出る。

さて、アイツを腹から引きずり出したらどう叱ってやろうか。

そんな事を考えながらおっさんの部屋に向けて踏み出した。

作戦会議

榊博士の研究室は彼のその権威もありラボラトリー内ではかなり広い部類に入るのだが、ソーマが入室するとすし詰め状態だった。

居るのは第一部隊の全員と何故か第二、第三の隊長であるタツミ、そしてソーマにとつて懐かしい人がいた。

「羅法のおっさん？何故ここに…？」

「おうソーマや、こんなおっさんでも一応隊長なんだがね……」

ボサつとした黒髪に眠たそうな半眼になった茶のかかった瞳。

リンドウの物に酷似した色あせた青の士官服に獲物の血やら油やらがしみ込んだ灰茶のロングコート。

そして口に咥えるは禁煙三年目なためにハツパの代わりにココアシガレット。

羅法らのり、道彦みちひこ、
元第一部隊副隊長で現第四部隊隊長。

京也に次ぎ十年以上神機使いをやっている大ベテランだ。

その経験は間違はなく現在最高であり神機、特にアサルトに関して操作、教鞭共に彼を超える者は居ないと言われている。

また様々な武勇伝を持つし年季が長いゆえの独特なクセやら逸話やらいろいろあるが、大きな特徴を述べるとすれば家族全員が神機使いだということと…。

「ここにいるのは俺ら護送班もこの作戦に参加するからだよ。詳しくはツバっちゃんにでも聞いてみな」

「羅法大尉、ツバっちゃんと止めていただきたいのですが」

「なぐに堅いこと言うない。『私の事をどう読んでくださっても構いません』って言うってただらろ？」

「それは昔の話です！」

「かっかっか」

あの鬼教官ツバキを手玉に取れるということ、である。

「まくそれは一先ず置いといて、ツバっちゃん、まずソーマに状況を教えてやりなや」

「……はあつ、分かりました。ソーマ、神無中尉から何か聞いたか？」

「深夜が生きていて救出作戦をたてているとだけ聞いた」

「うむ、その通りだ。ソーマのためにもう一度一から説明する。皆も聞き頭に叩き込め
！」

ツバキは部屋の中央に設置しているホワイトボードの前に立ち、指示棒を持つ。

「今回の標的、プリティヴィ・マータは深夜を喰らった後保有するアラガミ誘引能力を使

用し小、中型アラガミを支配下に置き大群を率いて廃寺付近に籠城している。敵方の総数は三百、小型を除けど百を超える。地形の問題もあり正面突破は厳しいと判断した。この状況を打破するべくある装置の開発を榊博士に依頼した。榊博士、説明を頼めるでしょうか」

「ああ、任せて欲しい。さて、皆はこの状況を打破するには何が今必要と思うかな？つとこれはさつきも聞いたから飛ばそうか。私はまず親玉の周りに群がる障害を排除すべきだと考えた。そのために今回開発したのはズバリ、アラガミ誘引装置だ。これは元から私が研究していたアラガミ誘引フェロモンのノウハウが応用出来たからね。必要なのはプリティヴィ・マータが持つ誘引能力を超える干渉力だ。そのためにはプリティヴィ・マータの能力の詳細が欲しかったんだけど、これに関してはソーマ君の神機に付着していたプリティヴィ・マータのマントが役に立った。どうやら誘引物質はマントで生成されていたようでね、いいサンプルになったんだ。開発したアラガミ誘引装置は縦横六十センチ程に高さ二メートルの大ききで輸送用小型トラックに乗せて運用することになるね。耐久性は重視していいから大きな衝撃には耐えきれないかもしれないため気を付けてほしい」

「榊博士、ご説明感謝します。今榊博士が説明してくださいましたアラガミ誘引装置は廃寺の風上に位置するここβ地点で起動、その後第四部隊に護衛されながら離脱し中小アラ

「なあソーマ、少しボクに付き合ってくれるかな？」

「あ？」

ミーティングが終わり榊の研究室から出たソーマにエリックが嫌な意味で取れそうな言葉で話しかけてきた。

「・・・別に構わない。だが出来るなら神機保管室に向かいながらでいいか？少しでも体を馴染ませておきたくてな」

「ああ、それなら歓迎だ。同行しよう。ボクも体を動かしておきたかったんだ。ミーティングからどうも体がうずいてね」

「俺の神機と訓練場は使えるか？」

「あ、ソーマ君。うんバッチシだよ！修理だけじゃなくて強化までしておいたから」

「・・・強化だと？」

「榊博士からソーマ君が持って帰ってきた変異種のプリティヴィ・マータのマントを

貰ったから神機の改修に使ったんだ。ほら！」

リツカが見せてきたのはソーマの愛機〈ヘイブルワン〉。

バスターの初心者がよく使うノコギリに酷似しているがソーマが今まで狩り、喰らってきたアラガミの力を取り込み、刀身から柄に至るまで全てが黒く染まっている。

獲物の血を滴らせソーマの肩に掛けられるその姿はまさに悪魔^{イブルワン}。

「ん？歯が少し赤いか？」

「その通り！マータのマントの細胞を癒着させたら変色したんだよ。今まで色んな素材と組み合わせてきたけどこんな変化見たことないよ。まだ試せてないんだけど同種のおラクル細胞の結合を破壊しやすくなってるはずなんだ。サンプルがもうちょっと有ればよかったんだけどね」

「それはいいな、っし！」

リツカから〈ヘイブルワン〉を受け取り一閃。

さらに一度肩にのせてから二、三度振って感覚を慣らしていく。

「・・・十分だ、相変わらぬいい腕をしてるな」

「えへへっ、そりやどうも」

「次は体を動かして確かめたい。訓練場を頼めるか？」

「仮想敵はプリティヴィ・マータでいい？」

「ちよつと濟まないリツカ君。ボクの神機も渡してくれないかな？ソーマと一緒に動きたいからね。チームワークの確認をしたいんだ」

「りよーかい。エリックの神機は右奥から三番目だよ。二人とも訓練室の中で待って」

「ソーマ」

「・・・ん？」

「君にとって深夜君はどんな存在なんだい？」

「・・・どんな存在、だと？」

プリティヴィ・マータの噛みつきがソーマ目掛けて飛ぶ。

それを手堅くガードしカウンターに顔に一発、マータが身をのけ反らせ退散する。

「ああ、友人？戦友？好敵手？幼馴染？それとも・・・思いい人？」

「・・・」

プリティヴィ・マータの爪がソーマの目の前を通り過ぎる。

その間合いと軌道を完全に見切っていたソーマは一步だけ下がりヘイブルワンに構えていた。

腕を振れば当然隙ができる。

あとはそこに全力を叩き込むだけだ。

「グオオオオオオオ」

「深夜君を助けようとするその感情は本当に友情や家族愛なのかい？恋愛感情は含まれていないと？」

「・・・さあな。俺にもよく分からない」

「そうかい」

怒りを露わにしたマータが手を叩き付ける。

当然ソーマは避けるがそれくらいはマータにも予想がつく。

故にそのままソーマに追撃しようとして、顔が爆発しマータの気がそれる。

絶妙のタイミングで入ったそれはエリックの援護射撃だ。

「・・・だが一つ言えることがある」

「ほう、それは何だい？」

「それは——」

一瞬、自分を叩きのめしたソーマの事を忘れエリックに注意が向き——

「深夜は何が何でも助けたい相手だということだ」

——オラクルエネルギーを纏った刃、チャージクラッシュユがエリックの方に顔が向

きから空きになった首に吸い込まれるかのように命中し、

—— 斬 ——

マータの首が、宙を舞う。

「……ま、今のところはその答えで満足しておこうか」